

ドミニコ会士コリヤード編『懺悔録』に記録された日本人信徒の肉声

—— 特に第六誠に反する罪の懺悔をめぐって ——

日 埜 博 司

イスパニア人ドミニコ会士ディエゴ・コリヤード Diego Collado, O. P.^(*) が1632年にローマの布教聖省（プロパガンダ・フィデ）から刊行した『懺悔録』という書物がある^(**)。ラテン文字のフルタイトルを校訂を施したうえで示すと、

Niffon no cotobani yō Confesion vo mōsu yōtai to, mata Confesor yori goxensacu mesaruru tame no canyōnaru giō giō no coto. Danguixano monpa no Fr. Diego Collado to yū xucque, Roma ni voite corevo xitate mono nari. 1632.

となる。これを翻刻すると、

『^{にほん}日本の言葉によ^{まう}うコンヒサンを申す様体と、またコンヘソールより^{ごせんさく}御穿鑿めさるる為^{かんえう}の肝要なる条々^{どうでう}のこと。談義者の門派^{だんぎしや}のフレイ・ディエゴ・コリヤードといふ出家^{もんぱ}、ローマに於いてこれを仕立^{しゆつけ}てもものなり。1632〔年〕』

となるが、その内容からわが国における通称すなわち『懺悔録』に従うことにする。

(*) 1589年頃、イスパニアのカセレス県ミアハーダスに生まれる。

1604年7月サラマンカのサン・エステバン修道院でドミニコ会に入会。05年7月立誓。11年マニラに至る。19年（元和五）年7月末長崎に渡来。有馬・有家・郡・長与・長崎で活動。ドミニコ会日本管区長代理（在位1621-22）。22年9月10日（陰暦八月五日）、長崎でいわゆる元和の大殉教を目撃、その体験をヤシント・オルファネールの『日本キリシタン教会史』の『補遺』に記述した。在日ドミニコ会士2名とともに残留。10月10日（陰暦九月六日）、日本二十六聖人の列福列聖調査書を作成。管区調停者としてローマへ赴くようにとの特別命令を受け、22年11月初め日本を去り、23年ローマ着。ローマとマドリッドで日本イエズス会士に対する告訴状を提出する。イスパニア政府と布教聖省から事情聴取を受けた後、後者の費用で数点の著書を出版した（『懺悔録』はそのうちの一書である）。さらに35年、総長直属のサン・パブロ修道宣教会創立の特許を得、同会員団を率いてフィリピンに赴いたが、管区長の反対を受け、イスパニア国王からもローマ帰還を命ぜられ、やむなく同会を解散した。しかしローマには戻らず、ヌエバ・セゴビアの修院に隠退して修道生活に専念した。その後、国王の命に従いローマへ戻るためマニラを出発したが、出港後乗船が沈没し、41年8月溺死（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、井手勝美執筆「コリヤード」の項）。

(**) 私は昨年（1999年11月5日）、リスボアで催されたコロック



図1 『懺悔録』扉。大塚光信著『コリヤード ざんげろく私注』（臨川書店、1985年）より。

「日本におけるキリスト教」(於、ポルトガル・カトリック大学メデイロス枢機卿記念講堂)によれば、コリヤード『懺悔録』に関する報告を行なってきた。それぞれ25分の発表時間には質疑応答の時間が含まれるから、日本人キリシタンの犯した“罪”の背景にまで踏みこんで論及するのは、残念ながら不可能であった。そのための貯えも足りなかった。いきおい、ポルトガル人聴衆の興味を惹きそうな懺悔に焦点を合わせ、それをポルトガル語に直して紹介し、かつ必要最小限の解説を加えるだけで辛抱せざるを得なかった。それでも私の報告は素材そのもののおもしろさゆえであろう、11月6日付の全国紙『プブリコ』文化欄にその概要が紹介されていた。

『懺悔録』は、徳川幕府のキリシタン禁教下にあつて苛酷な信仰生活を送る日本人キリシタンの生々しい懺悔(カトリックでは受洗後に犯した罪を司祭へうちあけ、その許しを乞う秘蹟にあずからねばならない。その懺悔を現在の教会用語では「告解」と呼ぶ)をいわば肉声のままラテン文字(*)で記録にとどめた異色の書である。

(*)より正しくは、独特の綴り字や、特殊記号の助けを借りて、いわゆる四つ仮名やオ行長音の開合などを弁別するポルトガル語式のローマ字。ただしコリヤードはこれを完璧に駆使しているわけではない。ポルトガル系イエズス会宣教師が確立した日本語表記法を規範と見る立場——この立場が絶対に正しいかどうかは別として——からすると、意味も意図も分明ならざるアクセント記号らしきものがみだりに現われる。そのため本稿では、後述の手続きに従って原文に校訂を施す。

『懺悔録』は大塚光信の校注本(『コリヤード懺悔録』岩波文庫、1986年)のおかげで私どもにも手軽にその本文と接することができる。この優れた国語学者が京都の臨川書店から刊行した『ざんげろく私注』(1985年)は、解説と原著の翻刻(ラテン文字で書かれた日本語を漢字仮名交じり文に開くこと)、索引と原著影印(大塚光信架蔵本)までを収載している。岩波文庫本の翻刻が現代仮名遣いで行なわれているのに対し、臨川本の翻刻にはきちんと歴史的仮名遣いが用いられてもいるから、後者、すなわち『ざんげろく私注』一書を座右に置けば



図2 『告解』(作者不明の木版画。1482年)。ジャン・ヴェルドン著『図説 快楽の中世史』(原書房、1997年)より。



図3 日本人信徒の告解の様子。南蛮文化館蔵『南蛮屏風』(部分)。青畳に座った日本人キリシタンが目を伏せて格子越しに告解をしている。告解を聴いているのはイエズス会の司祭。数ある南蛮屏風の中でこれほどはっきり告解のシーンが描かれている例は非常に珍しい。松田毅一 坂本満共編『近世風俗図譜 13 南蛮』(小学館、1984年)より。

我々は安心してコリヤードのテキストに就くことができるであろう。

本稿で引用する翻刻は『ざんげろく私注』に収載された歴史的仮名遣いのそれにほぼ拠る。大塚の採用した「促音・拗音はそれに相当するかなを現代表記風に小書きする」という方法もそのまま踏襲する。試みに付す現代語訳であるが、これは語彙ひとつひとつの国語史的吟味を十分に経たものではないし、全般として感性が勝ちすぎた翻訳であることも認めるにやぶさかではない。が、翻訳では全体的なムードの伝達もきわめて重要な要素であると考え直し(辞書上の意味が逐語的に合致していても全体として場違いな印象を与える翻訳は、語学的次元の誤りが多い翻訳と同等、もしくはそれ以上に欠陥品である)、あえて素人の蛮勇を振るうことにする。

『懺悔録』を内容面から三部に分けるとほぼ次のごとくである。

I 教義宣言の文

II 信徒による告解の文

III 司祭による訓戒の文

書物の体裁としては左ページにラテン文字で記された日本語が、右ページにはそれに対応するラテン語訳が、それぞれ印刷されている。この形式は全篇にわたり一貫しており、例外は「扉」と「印刷允許状」と「読者に寄する序言」、それに巻末の「正誤表」の各ページのみである。

I がおおむね神父・信徒で交わされる対話で成立しているのに対し、II には信徒の言葉が、III には神父の言葉が主として載録されている。本稿の関心はいうまでもなく II に、それに次いで III に集中する。II には禁教下の日本人キリシタンが語る率直かつ赤裸々な懺悔がいわゆるモーセの十誡と、カトリックの七大罪(モルタル科。『ドチリナ・キリシタン』によれば、高慢・貪欲・邪淫・瞋恚・貪食・嫉妬・懈怠の七つ)とにほぼ即して整理され載録されており、III にはそれぞれの懺悔に対応する司祭の訓戒の言葉が収録されている。

『懺悔録』はこのように基本的には十誡・七大罪のそれぞれに背いた罪の告解、さらにそれぞれの罪に対する司祭の訓戒を記録にとどめた編著であるが、その中でもっとも詳しく、しかも群を抜くおもしろさを具えているのは、第六誡(『サルワトル・ムンヂ』では「邪淫を犯すべからず」。新共同訳では「姦淫してはならない」)をめぐる日本人キリシタンのもろもろの懺悔であろう。キリシタンが発する懺悔の数々は、信徒として求められる性倫理の規範と、日本人がそれまで罪にあたるとは夢にも思っていなかったもろもろの性習俗との板ばさみにあって、悩み戸惑う信徒たちの真情の吐露であるとともに、わが性愛史の一端をはからずも明らかにする稀有な証言集、と評することができる。

平生、キリシタン時代、ひいては大航海時代に関する日葡双方の文献・史料を双方向的に紹介しようと心がけている者として、また、リスボアにおける多少の反響にも励まされて、私はもう少し本格的に『懺悔録』をポルトガル人に紹介したくなった。そのためにやりたいと思うことは次の二点である。

1 『懺悔録』を日本語テキストから全文葡訳してその内容をわかりやすく欧米の研究者へ伝える。

2 日本人キリシタンの性的逸脱の背景にあるわが古来の習俗を探り、しかもその逸脱がわが性愛史・婚姻史のスタンダードに照らせばしかるべく正当化されうる場合もあったことをポルトガル語で記述する。

『懺悔録』の内容をポルトガル語に直し、その内容を日本側の視点から考察するための前提として踏むべき文献学的手続き、特にラテン文字の日本語原文をどう校訂するかについてはいろいろと厄介な問題が多いのだが、ここではそのために適用する主たる基本ルールを『懺悔録』に現われる語彙を例示しつつ列挙する。

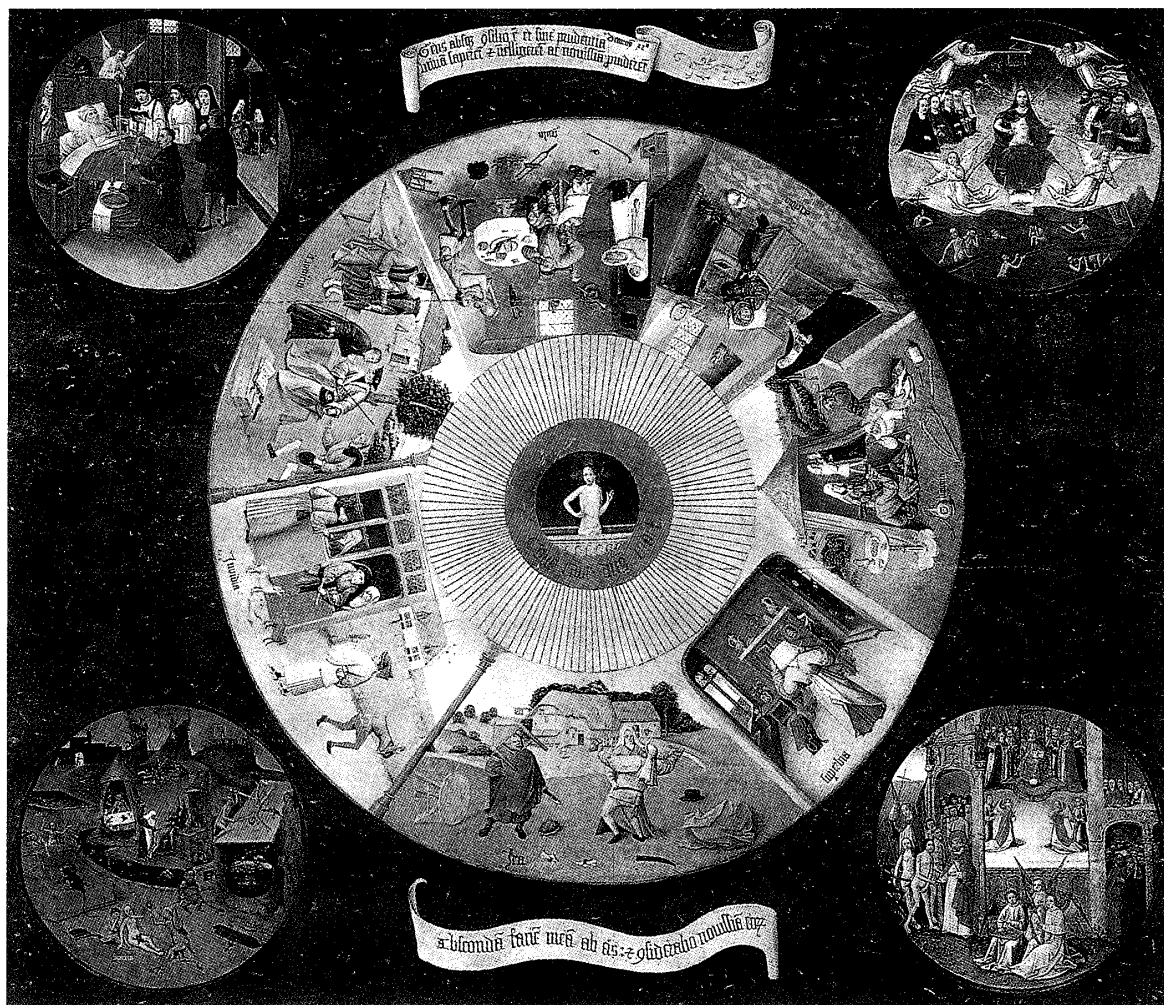


図4 ヒエロニムス・ボッス『七つの大罪』（プラド美術館蔵）。1475–80年。油彩・板。眼をかたどった中央の円周に沿って憤怒・傲慢・淫欲・怠惰・大食・貪欲・嫉妬の七大罪の場面が描かれる。瞳の中心部分には蘇ったキリストが自らの傷を指し示している姿が描かれ、その下に「心せよ、心せよ、神は見給う」と記される。大高保二郎 雪山行二共編『NHK プラド美術館 3 王室の大いなる遺産——ボッス、ティツィアーノ、ルーベンス』（日本放送出版協会、1992年）より。

1 「オ」の長音はこれを特殊記号を用いて二種類に区別する。すなわち、「口を開いて発音」（ジョアン・ロドリゲス著『日本大文典』土井忠夫訳、三省堂、1955年。原著は1604年、長崎刊）し、「アウ」に由来する開音の「オー」[o:] を“ô”で、「唇を円く近寄せ口を少しく閉じて」（同上書）発音し、「オウ」または「オオ」に由来する合音の「オー」[o:] を“ô”で、それぞれ表記する。例、dôgu（道具）と cōron（口論）、fiôrô（兵糧）と fôcô（奉公）等。

2 「ヤ」「エ」（または「エ」）「ヰ」（または「イ」）「ヨ」「ユ」は、それぞれ“ia”, “ie”, “i”, “io”, “iu”と表記し、[ja] [je] [ji] [jo] [ju] と発音する。例、iacusocu（約束）、ienpen（縁辺）、icari（怒り）、iôsugauari（様子変はり）、iurai（由来）等。ちなみに『日葡辞書』では“ya”, “ye”, “i”, “yo”, “yu”と表記されているが、双方に本質的な差異は認められないのでコリャードの綴り字を尊重する。

3 「ワ」「ヲ」（または「オ」）「ウ」は、それぞれ“va”または“ua”, “vo”または“uo”, “v”と表記し、[wa] [wo] [wu]と発音する。例、varambe（童）、iuaiibi（祝ひ日）、votoco（男）、tauosu（倒す）、yqiiio（浮世）等。

4 「シャ」「シェ」「シ」「ショ」「シュ」は、それぞれ“xa”, “xe”, “xi”, “xo”, “xu”と表記し、[ʃa] [ʃe] [ʃi] [ʃo] [ʃu]と発音する。例、xabet (差別), xecai (世界), xinjit (真実), xosa (所作), xucqe (出家) 等。

5 「ジャ」「ジェ」「ジョ」「ジュ」は、それぞれ“ja”, “je”, “jo”, “ju”と表記し、[ʒə] [ʒe] [ʒo] [ʒu]と発音する。例、jacufai (若輩), jennin (善人), jifi (慈悲), jōzu (上手), jūdo (十度), 等。

6 ハ行音は、それぞれ“fa”, “fe”, “fi”, “fo”, “fu”と表記し、[fa] [fe] [fi] [fo] [fu]と発音する。例、fada (膚), fenji (返事), fima (暇), fotoqe (仏), fumi (文) 等。

7 「ジ」「ヂ」と「ズ」「ヅ」の発音の違いを表わすため、それぞれ表記上の区別を施す。例、jinen (自然) と fagi (恥), zuibun (随分) と vonozzucara (自づから) 等。ジョアン・ロドリゲス『日本小文典』(拙訳, 新人物往来社, 1993年。原著は1620年, マカオ刊) は従来一般的であった「ヅ」を zzu とする表記法に反対し独自に dzu という綴りを考案した。日埜は dzu のほうが確かに一段優れた表記法であると思うが、ここではコリヤードの表記を尊重する。

8 「カ」「ケ」「キ」「コ」「ク」は、それぞれ“ca”, “qe”, “qi”, “co”, “cu” または “qu” と表記し、[ka] [ke] [ki] [ko] [ku]と発音する。例、caracuri (からくり), qeracu (快樂), qinjo (近所), cotoba (言葉), cuchi (口) 等。

9 「ガ」「ゲ」「ギ」「ゴ」「グ」は、それぞれ“ga”, “gue”, “gui”, “go”, “gu” と表記し、[ga] [ge] [gi] [go] [gu]と発音する。例、gatten (合点), guecai (下界), dangui (談議), gotai (五体), miguruxij (見苦しい) 等。ロドリゲス『日本小文典』は「ゲ」と「ギ」の表記に関して、これがポルトガル語を母語としない者によって「グエ」「グイ」と発音されるのを防ぐため、それぞれ ghe, ghi と綴るべきであると主張するが、ここでもコリヤードの表記を尊重する。

10 「ツ」については入声形の“t”と、開音節化形の“tçu”に分ける。例、xetxet (節々), tçutome (勤め) 等。翻刻において前者は片仮名で、後者は平仮名でそれぞれ表記する (ルビも同様)。

11 「ニャ」「ニョ」はそれぞれ“nha”, “nho”と表記し、[na] [no]と発音する。例、nhacudō (若道), nhôbō (女房) 等。

ではこれから、モーセの十誡のうち主として第六誡(*), すなわち「姦淫してはならない」の掟に反する罪の懺悔を——校訂を施した原文・翻刻・現代語訳によって——紹介するとともに、その懺悔の背景にあるわが国独自のメンタリティーなり習俗なりに多少の探りを入れてみようと思う (『懺悔録』からの引用文のみカギ括弧をつけずその前後を一行ずつ空ける)。

(*) 十誡の項目区分の方法は、ユダヤ教とキリスト教で、またキリスト教の諸宗派によって多少の違いがあるのだが、本稿では当然ながら、『懺悔録』でコリヤード自身が立てた区分法に従う。日本イエズス会のコレジオが刊行した『ドチリナ・キリシタン』(1600年刊。ローマ字本。水府明徳会蔵。重要文化財) に見える十誡を次に示す (海老沢有道他編『キリシタン教理書』[『キリシタン研究』30] 教文館, 1993年, 51ページ)。

第一。ご一体のデウスを敬ひ貴み奉るべし。

第二。デウスの貴きみ名にかけて虚しき誓ひすべからず。

第三。ご祝^{しゅくにち}日を勤め守るべし。

第四。父母^{おや}に孝行^{かうかう}すべし。

第五。人を殺すべからず。

第六。邪淫^{じやういん}を犯すべからず。

第七。偷^{ちゆうたう}盗^{たう}すべからず。

第八。人に讒言^{さんげん}をかくべからず。

第九。他のつまを恋すべからず。

第十。他物^{なもツ}をみだりに望むべからず。

『懺悔録』に載録されている日本人キリシタンの性的逸脱を試みに分類・整理してみると、以下のようになるであろう。ひとたび宿った命を胎児の段階で人為的に葬り去ったり（堕胎）、生まれたばかりの嬰兒を殺したり（間引き）することも、キリシタン教会が厳しく非難するところであった。これらは第五誡「殺してはならない」に反する罪ではあるが、広義の性倫理をめぐることがらであるゆえ、便宜上、8に包括して論及の対象とする。

- 1 姦通一般（婚姻外性交）
- 2 蓄妾
- 3 自慰もしくは手淫
- 4 処女に対する姦淫（1に組み入れる）
- 5 強姦（1に組み入れる）
- 6 誘惑による姦淫（1に組み入れる）
- 7 男色もしくは肛門性交
- 8 産児制限もしくは中絶性交
- 9 獣姦
- 10 堕胎（8に組み入れる）
- 11 間引き（8に組み入れる）

姦通

姦通（姦淫）とはカトリックの倫理に照らすと「貞潔に対し又罪なき配偶に対する愛と正義とに反する大罪である」とともに、「家族従って又国家及び教会に対する侵犯である」。さらにまた、「既婚者とその配偶以外の者との性的な罪悪行為であり、また配偶者間或は配偶者一方の自己自身に対する反自然的行為」（上智大学編『カトリック大辞典』I，富山房，1940年，467ページ。原文，正字。以下，同）もこれを姦通と呼ぶ。

旧約時代，姦通を行なった者は石打ち刑の罰を受けねばならなかった（「レビ記」20:10，「申命記」22:22-27。なお「エゼキエル書」16:38-40参照）。さらに，強姦（「申命記」22:25），近親相姦（「レビ記」18:6-18），男色もしくは同性愛（「レビ記」18:22，「申命記」23:18），獣姦（「出エジプト記」22:18，「レビ記」18:23，「申命記」27:21），自慰（「創世記」38:9-10）も，広い意味における姦淫と見なされた。福音書記者のうち聖ルカは，女を離婚することも離婚された女を娶ることも，姦淫同然の罪と見なした（「ルカによる福音書」16:18）。

もっとも一般的な意味における姦通の事例を，男性信徒の別の懺悔から二例示す（現代語訳は10ポイント活字で印刷する。以下，同）。まず独身女性と姦通した男の懺悔――

Mata : bechi no vonna to ichido toga vo vocaxi maraxita. Sore va uotto uo motaide, mada uotocono michi uo mixiranu tocorode, fajime cara iagatta redomo, amari susumeta niitte, tçuini uotoxi maraxita reba, tçucamatçuru tocoroni fiqiigocareta niitte, ie fataxi maraxeide, sara mo uchi uarazu, tada in ua foca ni moraxi maraxita.

また，別^{べち}の女^{をんな}と一度科^{とが}を犯^{をか}しました。それは夫^{をつと}を持^もた^ついで，まだ男の道を見知らぬところで，

初めから嫌がったれども、あまり勧めたによって、終に落^{つひ}としまらしたれば、仕るところに引^ひき動^{いご}かれたによって、え果たしまらせいで、皿も打ち割らず、ただ淫^{いん}は外^{ほか}に漏らしまらした。

別の女と一度罪を犯しました。未婚の女で、まだ男女の交わりなど知らぬ風情でございましたので、初めから嫌がっていましたが、私があまりにしつこく迫った結果、ついに落としはしたのですが、いよいよというときになって、女は身体を引き動かしましたので、情欲を満たすことはできず、「皿を割る」こともなく、淫液は外に漏らすほかありませんでした。

続いて既婚女性（しかも処女！）との不貞を働いた男の懺悔——

Aru toqi mo votto vo motta vacai vonna to toga ni vochi maraxite, xi fajimeta toqi, votto vo motta mono de gozareba, canarazu sono michi vo xitte, sara uchi vatte arō to vomōte votta redomo, sono votto ga canavaide gozatta niotte, vare va nari gatō temo, tçuini fonni itaxi maraxita.

ある時も夫を持った若い女^{をんな とが}と科に落ちまらして、し始めた時^{はじ}、夫を持った者でござれば、必ずその道を知^{がた}って、皿打ち割^{ほん}ってあらうと思うて居^をったれども、その夫が叶はいでござったによって、我はなり難^{がた}うても、終に本に致^{ほん}しまらした。

あるときは、夫のいる若い女と罪に陥りました。行為に入り始めたとき、夫のいる女であるから、定めし男女の道は知っていよう、すでに「皿」も割られ済みであろうと思っておりましたところ、その夫、インポテンツでありましたがゆえに予期は外れ、いろいろ困難はありましたが、とうとう私自身が「皿」を打ち割り、本行為に及んでしまいました。

desmemoriado. Atamari vōtōjenu mōno.
desuariat conla calientura. Necqī pa apāri-u.
desuergoneado. itāzura mōno. V
desuētarsi. me'pa sāmē. uū.
desuēgar. sara vo vchi vari. u.
des-izmar. fitonocōto v varū y naxiu
embaucar. fito v daradaci. u.
cmbōtar. fa v fi. iū.

図5 下から4行目に desuigar [処女を犯す]. sara vo vchi vari, u [皿を打ち割り、る] と見える。大塚光信 小島幸枝共編『コリヤード自筆 西日辞書』（臨川書店、1985年）より。

それにしても「皿打ち割る」という表現の奇抜さはどうであろう。この表現については、コリヤード自筆『西日辞書』（コリヤード自筆『西日辞書——複製・翻刻・索引および解説』大塚光信 小島幸枝共編、臨川書店、1985年、229ページ）のほか、コリヤードの別の労作『羅西日対訳辞書』（1632年、ローマ刊）にも類似の用例を見出すことができるものの^(*)、「皿打ち割る」を「処女を奪う」の意で用いる他例は

日本側資料には見えないという（大塚校注『コリヤード懺悔録』60ページ）（**）。

（*）『羅西日対訳辞書』に見えるその類例を、大塚光信「懺悔録のことば考証」（『国語国文』第32巻第2号，1963年，35～36ページ）に従って列挙しておく。

○ Stupro, as. desuirgar. [汚す] sara vo uchi vari, u. (さらを打ち割り, る)

○ Constupro, as. desuirgar, desflorar. [汚す] sara vo uchi vari, u. (さらを打ち割り, る)

○ Deflorare, ensuziar, manchar. [汚す] qegaxi, u. (汚し, す). virginem defloro, as. [処女を犯す] uonago uo sara uchi uari, u. (女子をさら打ち割り, る)

○ Deuirgino, as. qitar la viginad. [処女を犯す] sara uo uchi vari, u. (さらを打ち割り, る) inbon uo uocaxi, u. (淫犯を犯し, す)

（**）キリシタン時代の日本語に関して常日頃から指導を賜わっている同僚の水野恵子氏（国語史）がこの表現について貴重な示唆を与えるエッセーのあることを、初校ゲラの出た段階で教えてくれた。社団法人青少年交友協会が発行する『野外文化』第165号（2000年4月20日）所載の佐野賢治（筑波大学助教授）「十三七つ」である。13歳は、女子にとっては初潮を迎える年齢であり、成女したしるしにお齒黒をつけ、十三参りの折りには本裁の着物を着、男女交際を行なうことも正式に認められた。「十三七つ」によると、民俗語彙に見える「十三カネ」や「十三サラワリ」はそのような女子の身体的・社会的発育を反映した表現であるという。佐野のこのエッセーでは「十三サラワリ」がどこの方言であるか、文字資料に現われる表現であるかどうか、等、明らかにされていないが、大塚注には再考の余地があるといえそうだ。

儒教道徳においていわゆる貞操観念なるものは女にのみ求められ、男にはいっさい求められない。では建て前としては儒教道徳が民衆統治の具とされた江戸期、武家・町人を問わず、女ははたして操正しかったのか。氏家幹人『不義密通——禁じられた恋の江戸』（講談社選書メチエ，1996年）の第四章「妻敵討」には、この問題に関する種々の史料がわかりやすく紹介され、興味深く論じられている。

夫が妻とその不倫相手を殺してもよい（あるいは殺すべきだ）という観念は、すでに鎌倉期以前から存在したが、とりわけ戦国期に入って、戦国大名の分国法の中でそれが明文化された。この法理は江戸幕府にも受け継がれ、八代将軍吉宗の時代、寛保二年（1742）に完成した法典『公事方御定書』においても、確かな証拠があれば、夫は不義を犯した妻とその相手を殺害しても御構なしと定められた（「密通之男女共ニ夫殺候は、^{まぎれなきにおいて}於無紛ハ、^{かまひなし}無構」）。

このことは古く旧約時代のイスラエルでも同様であった。姦夫・姦婦は重ねておいて四つに……という掟は「申命記」に明記されている。曰く、「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない」（22:22）。

江戸期、不義の妻を殺害する行為は「妻敵討」と表記され、メガタキウチと呼ばれた。妻敵討は武士にのみ許された特権ではなかった。

寛永六年（1629）というから『懺悔録』の刊行よりも前の話である。九州は小倉藩領で、ある町人の妻が以前から関係のあった足輕に斬りつけられ重傷を負い、足輕のほうは切腹して果てるという事件があった。夫は藩の役人に、「妻の密通を知っていたら、ふたりを成敗したものを……。残念でなりません。このうえは、せめて生き残った妻だけでも私の手で殺させてください」と願い出た（「我等存候は、はたし可申を無念ニ存候〔中略〕然上ハ女を私手ニかけ申度存候間、其分ニ被仰付被下候へ」）。

仙台藩の判例集『刑罰記』によれば、享保九年（1724）、仙台城下柳町の「御そうめん師」田中屋喜右衛門が、妻を「囿」（座敷牢か）に押し込めているとして五人組から訴えられた。藩の役人が取り調べたところ、喜右衛門の妻の密通が明らかになる。妻が下人と不義を犯したので喜右衛門がその下人を解雇しようとしたところ、妻が夫を恨み、いろいろ不都合な事態が生じたので、喜右衛門は親類たちと協議のうえ、やむなく彼女を幽閉した——。

とまあ、これだけなら“よくある話”である。ところが例の下人、これが喜右衛門の「男色之相手」だったのである。妻はその関係に「嫉妬」して、「妻方へも遣し候様ニ」、つまり、わたしにも廻なさいよ、と夫に要求したから事情はややくしくなった。下人を妻に提供すればこれと通ずるのは目に見えている。が、もし拒んだなら、怒った妻に毒殺されるのではないか。そんな恐怖に駆られた喜右衛門は妻の要求に従い、下人の解雇を思いとどまったという。

しかし一般論としては、姦夫・姦婦に対する制裁は江戸期を通じてきわめて厳酷であった。氏家『不義密通』が紹介する多くの事例から察して、1597年の長崎を実際に見たフィレンツェ生まれの旅行家にして商人フランチェスコ・カルレッティの次のような記述は、たとえ明らかな誇張がそこに含まれているとしても、まったくの虚偽として無視するわけにはゆかないと思う。

「この人民は、異教徒であるにもかかわらず、ただひとりの婦人しか娶らぬ習わしである。彼らは姦通罪にきわめて重大な関心を持ち、この罪を犯した者はふたり、すなわち姦夫と姦婦の死をもって厳酷に処罰する。そのやり方はこうである。まずふたりを荷車に乗せ、両手を後ろ手に縛り、夫の家へ連行する。そして夫の面前で姦夫の男根を、あたりの皮膚もろとも抉りとり、そうして作った〈頭巾〉を姦婦の額に載せる。さらに姦婦の恥部まわりの肉片をリボン状に切りとり、そうして〈花輪〉をこしらえて、これを姦夫の頭上に載せる。かくて姦夫と姦婦は互いの局部による化粧を施され、裸形で市中を引き廻され、群集に向かって悲惨で汚辱にまみれたおのが肉体を晒す。その間も傷つけられた局所からはどくどくと血が流れ、ふたりは恥辱のうちに落命する」(Francesco Carletti, *Ragionamenti di Francesco Carletti Fiorentino sopra le cose da lui vedute ne' suoi Viaggi si dell' Indie Occidentali, e Orientali come d' altri Paesi*, Firenze nel Garbo, 1701, pp.71-72.)

カトリックにおける童貞性 *virginitas* とは、「徳としては、男女両性が道徳的動機から終生あらゆる性的満足を諦めることを指」し、貞潔の最高段階であるとされる(上智大学編『カトリック大辞典』Ⅲ, 富山房, 1952年, 686ページ)。旧約時代のイスラエルにおいて、処女性は結婚のための必要欠くべからざる条件と見なされたし(『申命記』22:13-21参照)、聖パウロは独身こそが主への全き献身を可能にするという理由で童貞生活の優位を強調した(『コリントの信徒への手紙一』7:25-35)。

そうしたことを念頭に置いたうえで『懺悔録』から次のような告解を拾う。

Mata, miga guan no xõgue vo xirareta votoco, xemete fadaie vo mixeô to jenacu fodo fisaxũ susumerareta reba, fajime va iomo iomo to mõxite fenqi xita redomo, tçvgõ ii tçumerarete, sore ni macaxe maraxita. Sono toqi votoco mo uaga fadaie uo mixete, uatacuxi ni tori cacatte tauosareta reba, fada to fada to auaxeta tocoro de, mofaia fi ga moietatte, nani nari tomo xi fatasõzure domo, uchi uattaraba, xijen mimochi ni natte, guaibun vo uxinauõ to mutçucaxũ zonjite, fon ni saxe maraxeide gozatta. Tocacu sara no tocoro ua uchi uaraide, tada sucoxi sonjite nocotta ga, sore iori foca ua riõfõ no foxij mamani itaxi maraxita. Sono uie mata micata cara xiri iori sureba, mimochi ni narõ qizzucaï ga nai to susumete, nhacudõ no iõni sore to tabitabi ne maraxite gozaru. Catatta bun ua iotçuqi no aida ni xigueô gozatta reba, sono nochi iorozzu ni acuguiõ ni maqete, tçuini menbocu mademo caronjite, sore to fonni uotoco no toga uo uocaxi maraxita. Core saisai de gozatta redomo, saiyo ni ua codane tutto uchi ni iri, mimochi ni nari cauaranu iõni samazama ni tacunda redomo, sono nochi ano fito uoba amari ni taixet ni uomõ niotte, qeccu sono co uo mõqete iocarõ to zonjite, mofaia sono mama uoqi marasuru coto ua mitçuqi no aida de gozatta. Mata igue no tacumi ua fitotçuqi no coto de uogiatta. Icutabi to

ua uoboie maraxenanda.

また、身が願^{ぐわん}の障^{しやうげ}碍^{がい}を知られた男^{おとこ}、せめて膚^{はだへ}を見せうと善^{ぜん}悪^{あく}程^{ほど}久^くしう勧^{かん}められたれば、初^{はつ}めはよもよもと申^{まを}して偏^{へん}氣^きしたれども、都^つ合^{がふ}言^{げん}ひ詰^つめられて、それに任^{まか}せまらした。その時^{とき}、男^{おとこ}も我^{われ}が膚^{はだへ}を見^みせて、私^{わたくし}にとり懸^{けん}かって倒^{たふ}されたれば、膚^{はだ}と膚^{はだ}と合^あわせたところで、もはや火^ひが燃^もえ立^たって、何^{なに}なりともし果^はたさうずれども、打^{うち}割^ぎったらば、自^し然^{ぜん}身^{しん}持^ぢちにな^なって外^{ぐわい}聞^{ぶん}を失^しはうと、むつかしう存^{ぞん}じて、本^{ほん}に致^{いた}させませいでござった。とかく皿^{りやうほう}の所^{ほしいま}は打^{うち}割^ぎらいで、ただ少^{すこ}し損^きじて残^{のこ}ったが、それよりほかは両^{りやうほう}方^{ほう}の窓^{まど}に致^{いた}せまらした。その上^{かみ}、味^{あじ}方^{かた}から、臀^{しつ}よりすれば身^{しん}持^ぢちにな^ならう氣^き遣^やひがないと勧^{かん}めて、若^{にやく}道^{だう}のやうにそれと度^{たび}々^{たび}寝^ねまらしてござる。語^よった分^{ぶん}は四^よ月^{つき}の間に繁^{あひだ}うござったれば、その後^{のち}方^{かた}に悪^{あく}行^{ぎやう}に負^{まか}けて、終^{しゆう}に面^{めん}目^{ぼく}までも輕^{かろ}んじて、それと本^{ほん}に男^{おとこ}の科^かを犯^{はん}せまらした。これ細^{さい}々^{さい}でござったれども、最^{さい}初^{じゆう}には子^こ胤^{だね}とつと中^{うち}に入^いり、身^{しん}持^ぢちにな^なり変^へはらぬやうに様^{よう}々^{よう}に工^{こう}んだれども、その後^{のち}、あの人^{ひと}をばあまりに大^{たい}切^{せつ}に思^{おも}ふによつて、結^{けつ}句^くその子^こを儲^もけてよからうと存^{ぞん}じて、もはやそのま^ま置^おきま^まするこ^ことは三^み月^{つき}の間^{かん}でござった。また、以下^{いげ}の工^{こう}みは一^{ひと}月^{つき}のこ^こで

私^{わたし}の貞^{せい}潔^{けつ}の誓^{ちか}願^{がん}から生^なずる妨^{さげ}を知^しった男^{おとこ}がおりまして、この男^{おとこ}、せめてとにかく肌^{かわ}を見^みせよと、口^{くち}説^{せつ}くこ^こ久^くしいものがありましたが、初^{はつ}めこそ、そんなことをしては、とあらがっておりましてものの、結^{けつ}局^{きよく}のところ、口^{くち}説^{せつ}きおとされて、男^{おとこ}に身^みを任^{まか}せてしまいました。そのとき男^{おとこ}は私^{わたし}の肌^{かわ}を見るや、私^{わたし}に襲^{おそ}いかか^かって押^{おし}し倒^{たふ}しましたが、肌^{かわ}と肌^{かわ}を接^{せつ}してしま^まうと、もういけませぬ。男^{おとこ}の欲^{よく}望^{ぼう}のほむらが燃^もえ立^たち、何^{なん}としても、その欲^{よく}望^{ぼう}を遂^{つい}げようとし^します。しかし処^{しよ}女^{にょ}の操^{そう}を与^あててしま^まって万^{まん}一^{いつ}妊^{にん}娠^{ごん}でもすれば外^{ぐわい}聞^{ぶん}悪^{あく}かろうと、面^{めん}倒^{たう}に思^{おも}ひまして、本^{ほん}行^{ぎやう}為^ゐには及^{およ}ばせませんでした。とにかく処^{しよ}女^{にょ}の「皿^{りやうほう}」は割^ぎられず、ただ少^{すこ}しばかり傷^{きず}を負^おっただけで済^すみましたが、その他の行^{ぎやう}為^ゐには、双^{すわう}方^{ほう}、欲^{よく}しいま^まに耽^{たふ}りました。さらに、臀^{しつ}から致^{いた}してもら^{もら}うなら、妊^{にん}娠^{ごん}する氣^き遣^やひはないでし^しょうと、私^{わたし}のほうから勧^{かん}めて、男^{おとこ}色^{しき}を行^{ぎやう}なう者^{もの}同^{どう}士^しのやうに男^{おとこ}と寝^ねたこ^こがたびたびございます。申しあげて参^{まゐ}りました所^{ところ}業^{ぎやう}は四^よカ月^{つき}にわたったこと^{こと}でして、その後^{のち}は何^{なん}につけ罪^{ざい}深^{しん}き行^{ぎやう}為^ゐにかま^かけ、名^な誉^よさ^さえ輕^{かろ}んずるに至^{いた}り、ついには男^{おとこ}と本^{ほん}当^{たう}に姦^{かん}淫^{いん}の罪^{ざい}を犯^{はん}してしまいました。しかも再^{さい}々^{ざう}にございます。最^{さい}初^{じゆう}のう^{うち}こ胤^{だね}がすつと中^{うち}に入^いって妊^{にん}娠^{ごん}せぬよう、さまざまな工^{こう}夫^ふを行^{ぎやう}ないましたけれども、やがては、あの人^{ひと}がかえって愛^{あい}しく思^{おも}われるやうになり、その子^こを儲^もけてよからうと存^{ぞん}じまして、自^し然^{ぜん}のなりゆき^{ゆき}に任^{まか}せること三^みカ月^{つき}に及^{およ}びました。な^なお、前^{まへ}記^きしたやうな避^ひ妊^{にん}の工^{こう}夫^ふを凝^ねらした期^き間^{かん}は一^{ひと}月^{つき}でした。幾^{いく}度^{たび}そうしたかは覚^{おぼ}えておりません。

カトリックの教^{きやう}えに随^{したが}って生^な涯^{ぎや}処^{しよ}女^{にょ}の純^{じゆん}潔^{けつ}を貫^{くわん}く誓^{ちか}願^{がん}を立^たてた女^{にょ}性^{せい}。この婦^ふ人^{にん}、初^{はつ}めこそ「よもよもと」言^{こと}を左^{ひだり}右^{みぎ}にして男^{おとこ}を拒^{きく}み続^{つづ}けていたにもかかわらず、しつこい口^{くち}説^{せつ}きに遭^あつてついには男^{おとこ}の手^てに入^いれられる。しかもこの婦^ふ人^{にん}、「味^{あじ}方^{かた} (=自分^{じぶん}) から、臀^{しつ}よりすれば身^{しん}持^ぢちにな^ならう氣^き遣^やひがないと勧^{かん}めて、若^{にやく}道^{だう}のやうに」その男^{おとこ}と交^{かう}わったこと (肛^{こう}門^{もん}性^{せい}交^{かう})、最^{さい}初^{じゆう}のう^{うち}は「子^こ胤^{だね}とつと中^{うち}に入^いり、身^{しん}持^ぢちにな^なり変^へはらぬやうに様^{よう}々^{よう}に工^{こう}んだ」こと (産^{さん}児^に制^{せい}限^{げん}) を告^こ白^{はく}して^{して}いる。い^いずれもカトリック倫^{りん}理^りに照^{てう}らせば罪^{ざい}科^かであること、後^{のち}述^{しよ}のとおりである。

ルイス・フロイスが1585年に島^{しま}原^{はら}半^{はん}島^{とう}の加^か津^つ佐^さで書^かき上^あげた小^{せう}冊^{さく}子^しの自^じ筆^{ひつ}原^{げん}稿^{こう}がマドリードの王^{わう}立^{りつ}歴^{れき}史^し学^{がく}士^し院^{いん}図^ず書^{しょ}館^{かん}に所^{しよ}蔵^{ざう}されて^ている。テ^てマ^まご^ごとに13の章^{しやう}に分^{ぶん}かたれ総^{そう}計^{けい}611箇^か条^{じョウ}の箇^か条^{じョウ}書^{しよ}きでもって日^{にっ}欧^{おう}間^{かん}に存^{ぞん}する風^{ふう}俗^{そく}・習^{しゆ}慣^{かん}の違^{ちが}いがこまごまと列^{れつ}挙^{きよ}してある。その内^{うち}容^{よう}から『日^{にっ}欧^{おう}風^{ふう}習^{しゆ}対^{たい}照^{しやう}覧^{らん}書^{しよ}』(以下^{いげ}、『覧^{らん}書^{しよ}』と略^{りやく}称^{しやう}する。本^{ほん}稿^{こう}ではLuís Fróis, *Europa-Japão. Um Diálogo Civilizacional no Século XVI*, José Manuel Garcia ed., CNCDP, Lisboa, 1993 をテ^てキ^きス^すトとして『覧^{らん}書^{しよ}』の新^{しん}たな和^わ訳^{やく}を試^しみる。た^たとえ^えば第^{だい}二^に章^{しやう}第^{だい}一^{いつ}箇^か条^{じョウ}を引^ひ用^{よう}する場^{ばう}合^{がう}、II:1と略^{りやく}記^きする)とでも題^{だい}しうるもの。その第^{だい}二^に章^{しやう}「日^{にっ}本^{ぽん}の女^{にょ}性^{せい}の人^{にん}柄^{がら}と

習俗について」の第一箇条には次のように見える。

「ヨーロッパでは、若い女性の至高の荣誉と財産は貞操であり、純潔が犯されぬ修道女のような生活を送ることである。日本の女性は処女の純潔をまったく意に介さず、それを喪ったからとて、名誉も結婚（の資格）も失わない」(II:1)

そのほかフロイス『覚書』には、日本女性の貞操観念の欠如にずばりと言及したものではないが、次のような項目も見える。

「ヨーロッパでは、女の親族がひとり誘拐されても、（その奪還のため）一族全員が死の危険に身をさらす。日本では、そのようなことが生じても、父母兄弟は見ても見ぬふりをし、いたってけろりとしている」(II:33)

「ヨーロッパでは、娘や乙女の（俗世からの）隔離は、はなはだ重大（問題）であり、嚴重である。日本では、娘たちは両親と相談することなく、一日でも、また幾日でも、行きたいところに独りで出かけてゆく」(II:34)

前出のカルレッティは、単身来日して初夏から初冬まで滞在するポルトガル商人の“長崎妻”の役割を、今でいえば中学生くらいの年齢の娘が担っていると驚きをこめて証言する。

「彼らは自分たちの娘や姉妹の貞操をほとんど顧慮しない。いや、そんなものには全然関心を持たぬといつてよい。ほかならぬ父母や兄弟が嫁入り前の娘や姉妹を、あっさりと、しかもはした金で身売りに出すということがしばしばある。売るほうにも売られるほうにも、からきし恥じらいはない。これは全国に蔓延するはなはだしい貧窮に迫られてのことだ。貧困こそ、この胸の悪くなるような破廉恥行為に人々を駆りたてる元兇である。これはいささか度が過ぎ、きわめて異様にして新奇なかたちを呈しているため、本当にこんなことが行なわれているのかどうか、それ自体に疑問を抱きたくもなる。でも、私にはポルトガル人という格好の証人がいる。特にシナすなわちアマカオ〔マカオ〕の島から毎年渡来するポルトガル人である。彼らが用いる一隻の船には、絹織物や生糸、胡椒や丁子——彼らはこの丁子を染料の原料として用いる——や、その他さまざまな商品が搭載されている。彼らはそのすべてを当地で売りさばき、見返りとして銀を受け取る。こうして商売に精出しながら、この長崎の港に8～9ヵ月間滞在する。上述の交易にけりをつけるのに費やす期間がそれだけなのである。ポルトガル人が到着し上陸するや、前述の期間彼らが下宿する家へ、婦女子の周旋屋どもが交渉と称してやってくる。そしてポルトガル人にこんなことを尋ねる。処女の娘を買うつもりはないか、それとも、より愉しく悦びの多いやり方でこれを囲うつもりはないか、と。その期間であるが、ポルトガル人の滞在する全期間でもよいし、数ヵ月とか数夜、数日とか数時間でも構わない。こうして周旋屋どもと契約を結ぶか、娘の両親の了解を得るかすると、代金を支払う。ポルトガル人が希望すれば、周旋屋は彼らを娘の家へ案内



図6 男を誘う遊女たち（クリーブランド美術館蔵『南蛮屏風』部分）。カルレッティの記述からすると案外、素人娘かもしれない。『近世風俗図譜 13 南蛮』より。

する。勝手に出かけて行って娘を見る連中もいる。その家であるが、市の郊外の小さな部落や在所にある。私が証人として面会したポルトガル人の多くは、情欲の赴くままこの天恵に身を委ね、わずかなかねで自分たちに可能な最上の愉悦だ、と吹聴している。ポルトガル人が、驚くなかれ、わずか14～15歳のかわいらしい少女を借り出すということさえある。代価はせいぜい3～4スクーディ。ただし、少女を好きなようにしておきたいと願う時間の長短によって代価は多少増減する。彼らがやらねばならぬことは、用済みになった少女を親元へ送り返してやることだけであって、他に配慮すべきことはない。少女もこの行動のゆえに結婚するチャンスを失いはしない。むしろ、多くはこのようなやり方で持参金をしっかりと稼いでから、結婚に至る。その貯蓄額は30～40スクーディに達するが、このかねは往々にして、ポルトガル人の手から渡されるものだ。少女を下宿に7～8ヵ月間囲い続けることの代償がそれだけなのである。同棲相手の少女と結婚してしまうポルトガル人もいる。もし日雇いの少女であれば、ほんのはしたがねを与えればそれでよい。もらうかねの嵩は相手次第ではあるが、多少給金に差があっても、少女のほうから雇われ話を断わってくることは、まずない。契約が少女の両親から拒まれたり、周旋屋どもから断わられたりすることは、さらにない。かねはそうした周旋屋に渡されるのだから、とどのつまり、少女は上記の目的をもって買われてきた奴隷女といってよい。周旋屋との契約によって、食べるものと着るものをもらえれば、もうそれで充分という少女もいる。いづれにせよ、少女に渡るかねはごくわずかである。残りの儲けは少女を抱える周旋屋どもの懐に入る。まったくもって、この種の忌むべき逸楽の豊富さにおいて、この国はよそのいかなる国にも負けない。他の悪徳のはびこりようについても同様であり、この点、世界のどこを捜してもこの国ほどひどいところはない。上のことは、とりわけ異教徒についていえることであり、彼らはさながら畜生のごとく、この世でもっとも恥知らずな所業に堂々と耽って省みるところがない。それが他人の眼にふれてもまったく平然としているし、人間的な裁きにも、神の審判にも、彼らはまったく畏怖の感情を持っていない」(Carletti, *Ragionamenti*, *op.cit.*, pp.72-76.)

* * *

さて、人間にとってもっとも根源的な営みであるはずの性の問題に決して正面から取り組もうとしなかった柳田派民俗学へ齢90を超えてなお痛烈な批判を浴びせ続ける在野の民俗学者がいる。赤松啓介(1909—)である。「タテマエとクレイゴト」の柳田派民俗学を向こうに廻し、「地獄の下まで自分で入って行って納得できるまで調べた」という自信に支えられた赤松の性民俗誌はまことに興味深い。

戦国期はもちろんのこと江戸期においても日本女性の生態は *virginitas* つまり童貞性に至高の価値を認めるカトリック倫理とは遠く隔たっていた。ムラの婦女子にとっていわゆる初交など、赤松の口吻を借りれば、「道で転んでスネをすりむいたぐらいの感覚であ」(『夜這いの性愛論』明石書店, 1994年, 39ページ) った。

その裏づけとなる史料を氏家『不義密通』(前掲) から引く。

まず、水野沢斎『養生弁』(前編は天保十三年[1842]刊)という書物には、「予が故郷予州などでは、遊女の類決してなし、其代り娘も下婢も後家も婆様も自堕落也、然れども売ものでなければ、深切づくならでならず」とある。私の故郷の伊予国(現、愛媛県)では男の性欲を解消するための遊女なんて存在しない。なぜなら素人娘や女奉公人、後家さらには年配の人妻(「婆様」)たちが、おおらかに相手をしてくれるから、というのである。しかも商売づくではない分、至れり尽くせりであった、というのだから結構な——というのは当節さしさわりもあるので、呆れた、くらいにしておく——話ではある。

熊本藩史料『姦犯』には、文政十年(1827)十二月に判決が下った横手村の少女強姦犯の記事が見える。犯人の名は丈右衛門。この男は、通りがかりの少女に背後から襲いかかって口をふさぎ(「後口よ

り捕へ口ニ手拭を当し、近くの小屋に引きずり込んで、無理やり劣情を遂げたのである（「小屋に連行、不法ニ押伏」。哀れな被害者は、出血して気絶（「破血いたし一旦は及気絶」）し、その後10日ほど患い伏していたという。

情状酌量の余地なし、と誰しも思う。が、犯人に即刻、刺墨および百答の刑が執行されたわけではなかった。裁判で問題にされたのが少女の年齢。彼女は事件当時16歳であったが、当節16にもなった娘が「破血」するなんて奇怪ではないか、という疑問が出されたのだ（「当世之女ニは不審之事」）。が、やがて疑問は解消される。「破血」の理由はすなわち、少女が虚弱体質であったのに対し、犯人の「丈右衛門儀、並を踰候大男根、実ニ強勢之者」であったから、というのである。ここに及んで初めて“16歳の処女”をめぐる不信が解消されたというのだから、驚くではないか。

ともかく江戸期の日本、特に田舎娘たちの性はよほど奔放であったようだ。その背景を氏家は、彼女らが「女の盛りの短さを深刻に受けとめていた点に求められるかもしれない」（『不義密通』21ページ）と考える。確かに、性の悦びを享受するための時間はあまりにも限られていた。いつ襲うとも知れぬ飢饉・貧困・流行病のせいで、いとも簡単にそれが断たれる例を、彼女たちはいやというほど見せつけられてきた。そのうえ当時の感覚では、はたちをいくつか超えた女など完全な年増であった。

処女の純潔をたつとぶべしというキリシタンの掟はむろん女性信徒にのみ授けられたわけではない。男性信徒もまた女性のためにこの掟を重んずるよう求められたはずであるが、実態はどうであったか。

『懺悔録』には、処女を相手に、今風にいえば結婚詐欺だの強姦だのにあたる罪を犯した一信徒の次のような告解が見える。結婚の空約束で処女を誘惑し淫欲を満たしたあげく一方的に棄ててしまったり、暴力づくで犯したその相手を妾に囲ったりしたことに対する懺悔である（こうした罪に関する聖書の訓戒としては、「ある男がまだ婚約していない処女の娘に出会い、これを捕らえ、共に寝たところを見つけられたならば、共に寝た男はその娘の父親に銀五十シケルを支払って、彼女を妻としなければならない。彼女を辱めたのであるから、生涯彼女を離縁することはできない」という、これまた「申命記」〔22:28〕からの一節を挙げうる）。

Nhôbôgata ni vochita mo môsu ni uoiobanu. Tocacu tadano mono, fitori uonna to neta coto, tairiacu xifiacu do amari de gozarô. Votto no aru vonna mo vovôte, icutabi tova voboie maraxenu. Ichido zzutçu, nido, xi, go rocudo zzutçu gozatta. Sono vchi, mata fannen, ichinen, futatçuqi, ninenno mecaqe mo gozatta. Nando zzutçu tomo voboie maraxenu. Tada chôbi ni macaxe maraxita. Votoco uo mixiranu vonna gorocu nin no fajime no fagi vo tori maraxita. Ichinin va damaite nhôbô vo torô to iûte nabiqi maraxite, tçuini vocaite cara, ii caiete, sute maraxita. Ma ichinin va fajime cara iiagatta redomo, nacadachi vo tanôde amari susumeta tocorode, tçuini iroiro no iacusocu vomotte tabacatte, sono iorocobi vo motomete cara nanimo togue maraxenanda. Ichinin va mata vare to dôxin xezunba sonomama cubi vo voxi sucumete corosô to vodoxi ni iûte, sunavachi votoxi maraxite, nochî mo mitçuqi no tecaqe vo mochi maraxita. Nocori no sannin to sando zzutçu bacari vochi maraxita. Mata togueta coto ni nen vo caquru tabi goto va, sono iorocobi ni fuqeri, musabori nomi mo gozaru.

によぼう 女 房方に落ちたも申すに及ばぬ、とかくただのもの、独 女と寝たこと、大 略四百度あまりでござらう。夫の有る女も多うて、幾度とは覚えませぬ。一度づつ、二度、四・五・六度づつござった。その中、また半年・一年・二月・二年の妾もござった。何度づつとも覚えませぬ。ただ調備

に任せました。男を見知らぬ女、五・六人の初めの恥^{はぢ}をとりました。一人は騙^{いちにん}いて、女房をとらうと言うて靡^なきまらして、終に犯^いいてから、言ひ変へて、捨てました。ま一人は、初めから嫌^いがったれども、媒^なを頼^なうであまり勧めたところで、終に色々の約束をもつて謀^たつて、その悦^たびを求めてから何も遂^いげませなんだ。一人は、また我^いと同心^{どうしん}せずんばそのまま首^{すく}を押し竦^{すく}めて殺さうと威^{おど}しに言うて、即ち落^{すなは}としまらして、後も三月^{のち}の妾^{みつき}を持ちました。残りの三人と、三度^たづつばかり落^たちました。また遂^たげたことに念^{むさぼ}を掛^かくる度^{たび}ごとは、その悦^たびに耽^たり、貪^{むさぼ}りのみもござる。

女と不貞の姦淫に陥ったこともいうには及びませぬ。とにかく独身の女・未亡人と寝たことは大略四〇〇度にも上りましょう。夫のある女と寝たことも多く、幾度とは覚えておらぬほどでございます。一度だけの女もありますが、二度、さらには四・五・六度と情を交わした女もでございます。不貞行為の中で、半年・一年・二月・二年のあいだ妾として囲った女もあります。それぞれ何度そういうことを致したか覚えてもおりませぬ。ただ好機があればそれに乗じて罪に耽りましてでございます。男を見知らぬ女、つまり生娘五、六人の処女を奪いました。ひとりに対しては、騙して女房にしてやろうと申し、これを靡かせたあげく、ついに犯してから前言を翻して棄てました。もうひとりの生娘は初めから嫌がっておりましたけれども、仲介人さえ立てて是非とも私と懇ろになるようしつこく勧めましたところ、ついにいろいろの空約束をもつてたばかりでした。悦^たびを遂^いげた後、何ら約束を果たさなんだことはいうまでもございませぬ。さらに別のひとりに対しては、私の言うことを聞かねば、ここで首を押し竦めて殺してやろうと威しのつもりで申し、その場で情欲を満たしましたうえ、その後もその女を三ヶ月妾として囲っておりました。残り三人の娘とはそれぞれ三度づつ科に落ちました。そのような生娘と淫欲を遂げたことを思い出し、そのたびにあのときの悦^たびにただ耽り貪^{むさぼ}りだけのこともございました。

コリヤード『懺悔録』において、司祭は信徒が行なった告解のすべてにもれなく対応して訓戒を与えているわけではない。あるひとつの罪の懺悔に対し何の訓戒も与えられていない例も、まもある。しかしながら、処女を奪った云々のこの懺悔に対しては、司祭による訓戒がきちんと収載してある。思うに、姦淫が処女を相手に行なわれたのを重視してであろう、司祭は次のような訓戒を弟子の日本人へ授ける。

Nhōbō ni torō to iūte fubon no vonna vo votoxiatta coto no toga va, sono iacusocu vo toguesiaxite iurusaremai to cocoroieare. Tadaxi iōsugavari ga atte, sō naranu ni voiteva, xemete sono cavari ni niai no coto voba sono vonago ni iarareide va. Vonajiqu: iroiro no iacusocu de tabacatta fubon no vonago ni, sono iacusocu ni xitagatte tçutome vo mesareio.

女房にとらうと言うて不犯^{ふぼん}の女^{をんな}を落^おとしあつたことの科は、その約束を遂^いげずして赦されまいと心得^{こころえ}あれ。ただし様子^{やうす}変^がはり^が有^あつて、さうならぬにおいては、せめてその替^かわりに似合^にひの^{こと}をばその女に遣^やられ^ないで。同じく、色々の約束でたばかりの不犯^{ふぼん}の女に、その約束に随^{したが}つて勤^{しん}めをめされよ。

女房にしてやろうと言うて「不犯の女」すなわち処女を犯したことの科について、その約束をきちんと守らぬ限りお赦^{おしや}しは^ないものと心得^{こころえ}よ。ただ「様子^{やうす}変^がわり^があつて」、すなわち事情が変わつて、そうもできぬ場合は、せめてその科にふさわしい償^やい^なをその女にしてやらねば。同様に、いろいろな空約束でたばかりの不犯の女たちに対しては、約束に随^{したが}つてしかるべき勤^{しん}めを果たすべし。

この司祭の言葉は、「人がまだ婚約していない処女を誘惑し、彼女と寝たならば、必ず結納金を払っ

て、自分の妻としなければならない。もし、彼女の父親が彼に与えることを強く拒む場合は、彼は処女のための結納金に相当するものを銀で支払わねばならない」という、「出エジプト記」(22:15-16)に見える訓戒と照応しているであろう。

* * *

特に西日本および南日本における庶民の婚姻習俗を考えるうえで等閑に付すわけにはゆかないのが、かつて日本の農山漁村に存在した「若衆組」あるいは「娘組」とよばれる未婚男女の年齢集団である(若衆組の呼び名は地方によってまちまちで、若イ衆組・若者組・若連・若組・若者連中・若勢・二才組などの別名がある)。

若衆組や娘組は、成年男女として心得るべきこと、身につけるべきことを厳しい上下関係の中で習い教わるための組織であった。この組織には「寝宿」もしくは単に「宿」とよばれる共同生活のための施設が付随していた。寝宿に入ることを「宿入り」といい、若者なら15歳頃、娘なら13歳頃にそれが行なわれた。宿入りがすなわち成年式の儀式に重なる例もあった。

寝宿に集まると、若者は、藁仕事や網の修繕など、娘は、藁仕事・芋績^{おう}み・糸繰り・機織り・麦の搗き合いなどいろいろな手仕事に励む。娘が手仕事にいそしむ宿へ同村の若者が三々五々訪れ、娘の仕事の手助けをしながら交歓する。そうして気に入りの娘ができれば、若者はその娘の家へ忍びこむ。これがヨバイ(夜這い)である(『国史大辞典』平山和彦執筆「寝宿」の項、同「若者組」の項参照)。

前出の赤松は、このヨバイが第二次大戦後、漁村、特に離島のウラ(浦)にかなり遅くまで残っていたと証言した後、それが行なわれる目的について次のように述べる。

「柳田派の民俗採取や、解説を読んでいるとふき出すのがある。夜這いは性交が目的ではなく、お互いにいろいろと語り合うのが目的であったなどという。こんなアホタレが採取する民俗資料など、信じられるはずがあるまい。お上品に語り合うだけなら、よるのよなかにわざわざ忍んで行かずとも、ひるひなかにいくらかでも機会がある。今夜、あの女は、あの娘は、どんなアシライをしてくれるか、というので胸をわくわくさせながら行くのだ。しかし女心と秋の空で変わりやすく、不首尾になることもある。遊郭のお女郎さんでも、機嫌を悪くすると馴染みでも振るのだ。だからといって遊郭は性交を目的とする所でなく、お女郎さんと文学、芸術などを語り合う所だというのだろうか。まあ解釈は自由だが、こんなバカモンに教育される奴がかわいそうになる」(『非常民の民俗文化——生活民俗と差別昔話』明石書店、1986年、185ページ)。

**Yobai. O chegarse a algũa mulher que não he
l-gitima dentro da mesma casa secretamente.**

図7 『日葡辞書』(オクスフォード大学ボドレイアン・ライブラリー蔵)に見える「夜這い」の説明。

Yobai という言葉、実は、イエズス会宣教師が日本人信徒の協力を得て編纂・刊行した『日葡辞書』(1603年、長崎刊。補遺04年刊)にも収録されている。発音は今と同じである。「同じ家の中で、正妻ではない婦人にこっそりと近づくこと」(*O chegarse a algũa mulher que não he legitima dentro da mesma casa secretamente*)という定義であるから、独身男女同士の交歓という意味とはやや色合いが異なる。

それはともかくこのヨバイ、カトリック倫理からすれば一種の姦通なのであろうが、日本では、この農山漁村にあっても、江戸期を通じて、性的な“不整合”のないことを婚前に確認し合うための、ごく日常的な習俗なのであった(赤松『夜這いの性愛論』38~42ページ参照)。夫婦はヨバイを繰り返すそ

の自然のなりゆきの中で、しかしある種の選別プロセスを経て成立する。漁村なら網元，農村なら豪農・地主というふうに，村落の指導的階級にある家の娘はともかく，名もない庶民の婚姻形態とは要するに上のものであった。

(*) このような習俗をキリスト教倫理の見地から日本固有の淫風陋習と断ずるのは間違いである。当時のヨーロッパでも寝宿・ヨバイに酷似した施設・習俗は見られたし，婚前の性交渉を通じていわば性的マッチングを考慮した後に行なわれる婚姻，つまり試験婚も，性倫理にはカトリック以上に潔癖なカルヴィニズムの支配地を別とすれば，南ドイツ・スイス・シュレージエンなどで報告されているからである。この件については浜本隆志『ねむり姫の謎——糸つむぎ部屋の性愛史』（講談社現代新書，1999年）に詳しい記述がある。

ヨバイに訪れる若者が単数であることはむしろ稀であった。だから，娘が身ごもった場合，胎児の父が誰だか分からぬケースが生ずる。「コドモが生れるとだいたいタネの卸し元がわか」ったとは言いいえ，生物学的に胎児の父ではない者が“父”になる可能性もかなり高かったであろう。しかし，そんなことは大した問題とはされなかった（赤松『夜這いの性愛論』203ページ参照）。一村の子は一村のもの，という潜在的な原理が機能していたからである。

またまた赤松を引くが，戦前のおおのの町工場に働いていたときの自らの体験について彼はこんな証言をしている。

「働きにくる女は殆ど亭主，子供もちだが，工場へ出ると別世界になる。工場働きしとれば，オヤジが工場でなにしとるかわかるやろ。同じことしとるだけや。子供ができたら，どうなるんや。あんたかて，うちが子産んだら，あんたの子か，うちのオヤジの子かわからへんやろ。うちの子は，うちが育てたらええねん，ということになった。農村の夜這い風俗も，スラム街に限らず長屋から女給に出ている家でも，娘が腹ボテになると，殆どその娘か，親たちが育てている。底辺の社会では女や娘が生んだ子供は，自分たちで育てるという性根があった」（『非常民の民俗文化』315～316ページ）。

大正期以前の田舎のムラでは，結婚生活でさえ，それはヨバイの延長のようなものであり，「大正初めには東播（＝播州東部）あたりのムラでも，膝にコドモをのせたオヤジが『この子の顔，俺に似とらんだろう』と笑わせるのもあった。夜這いや雑魚寝，オコモリの自由なムラでは当たり前なことて，だからといって深刻に考えたりするバカはいない」（赤松『夜這いの性愛論』109～110ページ）だったそう。

いみじくも『日葡辞書』には Tanega cauaru（胤が変はる）という成句が収載されている。「ふたり，あるいはそれ以上の子供が，母親は同じで父親が違っていること」（*Serem dous, ou mais filhos da mesma mãe, & de diferente pai*）という意味である。そういう事態がまま生じたことを裏づける言語現象とみるのは牽強附会に過ぎるか。

江戸期，幕府や諸藩は儒教倫理の浸透を図り，民衆統治の具たらしめようとしたが，在所のムラムラではそれとは無縁に，婚姻に関わる上記のような古俗が永く生き続けた。儒教が望む血液の父系的純化や，それに伴う倫理などはうわべの題目にすぎなかった。

上記のような性習俗がほうぼうのムラムラに根づいていたことに鑑みれば，非信者はいうに及ばず，改宗者にしても，少なくとも庶民にとっては，処女性を結婚の不可欠の要件とするような旧約の教え（『申命記』22:13-21参照）はとうてい理解を絶したに違いない。

『懺悔録』に，ヨバイと思われる行為を受けた女性信徒の告解が載録されている。一度はヨバイ男を追い返したものの，性懲りもなく再び同じ男がヨバイに訪れたとき，抵抗しつつも，「心が自然傾き寄って」，結局男を受け入れてしまったというのである。

まず彼女がヨバイ男を撃退したくだけから――

Sono uie, uare ga natçu no atçusa de iogui uo cabuxe canete, qe nozoite, mino uie ni nani mo nai, nete uoru tocoroie fito ga sorosoro to chicazzuite, ionaca no jibun ni sono nedocoro ga curõ gozaredomo, canete cara sono caqugo ga atte, niuacani miga mune ni te uo caqe saguri, nani mo iuazu ni, uieni norareta tocoro vo sari fazzusõ tote fataraita redomo, are ua sosoiaite, zozomeita raba uchi corosõ to mi uo uodosareta tocorode, chicõ uoru uchi no mono iori uoboieraruru mai tameni, amari uoto vo xenanda redomo, sono iõni furio na coto uo coraie canete, nacaba ua uosore, nacaba ua xicatte, tçuini sore uo cuchi de cami, te de saxi ague, jiiũni fatasaxe maraxeide, inaxe maraxita. Core ua ichido de gozatta.

その上、我が夏の暑さで夜着を被せかねて、蹴除いて、身の上に何もない、寝て居る所へ人がそろそろと近付いて、夜中の時分にその寝所が暗うござれども、かねてからその覚悟が有って、俄に身が胸に手を掛け探り、何も言はずに上に乗られたところを去り外さうとて働いたれども、あれはそそやいて、ぞぞめいたらばうち殺さうと身を威されたところで、近う居る内の者より覚えらるるまい為に、あまり音をせなんだれども、その様に不慮なことを堪へかねて、半ばは恐れ、半ばは叱って、終にそれを口で噛み、手でさし上げ、自由に果たさせませいで、去なせませうとした。これは一度でござった。

さらに夏の夜、暑さのために夜着も被らず、寝乱れて、一糸纏わぬ、あられもない姿で寝ておりますと、人がそろそろ近づいて参ります。夜中のこととて寝所は暗うございましたが、男はあらかじめその手筈を整えていたのでしょう、にわかに私の胸に手を掛け、まさぐり、ものも言わずに上から乗りかかって参りました。私はそれを払いのけようと身を動かしましたが、男はひそひそ声で、大きな音を立てたら殴り殺すぞ、と私を脅します。近くにいる内の者に気取られぬよう、男はあまり音を立てませんでしたけれども、私はあまりに思いがけぬことに堪えきれず、半ばは怖れから、半ばは腹立たしさから、ついに男を口で噛み、手で払い上げ、自由に欲望を果たさせることなく、去らせました。そういうことが一度ございました。

続いて、二度目のヨバイに訪れた男を受け入れてしまったことの懺悔――

Ma ichdo ua, chõdo maie no gotoqu ni, uonaji mono ga qite, miuo uocasõ tame, sucumerareta reba, fajime ua miga qi ni auazu, canete cara mo sono iacusocu iume nimo gozaraide, sucoxi taican fenqi xita redomo, cocoro ga jinen catamuqi iotte, tçuini ichido togani vochi maraxita. Sono toga va miga fajime de gozatta.

ま一度は、ちゃうど前の如くに、同じ者が来て、身を犯さう為、疎められたれば、初めは身が気に合はず、かねてからもその約束夢にもござらいで、少し対捍・偏気したれども、心が自然傾き寄って、終に一度科に落ちました。その科は身が初めてござった。

さらにもう一度、この前と同じ男が参りまして、私を犯そうと抱き疎めたのでございますが、初めは気にも入らず、ましてかねてよりそんなことをする約束などゆめゆめなく、少しばかり抵抗・反抗致しましたけれども、心が自然傾き寄って、ついに一度科に落ちてしまいました。そうした科に落ちたことは私にとり初めてでございます。

彼女が独身者であったか既婚者であったか、どのような身分の婦人であったかなど判然としないが、「夏の暑さで夜着も被せかねて、蹴除いて、身の上に何もない」というあられもない姿で寝ているとこ

ろを見ると、少なくとも武士階級の奥方ではあるまい。この女性信徒が農山漁村の庶人であったなら、「科に落ちました」とは言い条、はたして本気でそう考えていたかどうか。先述のように、ヨバイをカトリック宣教師は一種の姦通呼ばわりするのかもしれないが、ムラムラにあってそれはコミュニティー維持・存続のための当然かつ必然的な習俗であったのだから。

『懺悔録』には強姦未遂というべき咎を犯した一信徒の懺悔が見える。「もしある男が別の男と婚約している娘と野で出会い、これを力ずくで犯し共に寝た場合は、共に寝た男だけを殺さねばならない」と「申命記」(22:25)にあるから、旧約時代のイスラエルでは強姦は死刑に値する罪科であったわけだ。

Aru toqi mo, nivacani fito nai tocoro de fitori vonna ni tçuqiôte, xiqiri ni chixô ni tauore fuxi, sono qirumono vo carague, te axi vo mo tori sucumete votosô to xita redomo, narôzuru tocoro ni, vamecareta niitte, ie fataxi maraxeide, tada nhôbôgurui itaxi, in mo sono maie no quia fitori ni coboxi maraxita.

ある時も、^{にはか}俄に人無^{ひとり}い所で一人女につき合うて、^{しきり}頻に^{ちしやう}地上に倒れ伏し、その着る物をからげ、手足をもとり^{にようぼうぐる}竦めて落とさうとしたれども、ならうずるところに^{わめ}喚かれたによって、え果たしまらせいで、ただ女^{いん}房^{まへ}狂ひ致し、淫もその^{きは}前^{ほとり}の際・辺に零しまらした。

ひと気のないところで俄かにひとりの女にゆき逢ったときのことです。やにわにこれを地上に押し倒し、その衣裳をからげ、手足を押さえ竦めて欲望を遂げようとしたのですが、いざ行為に及ぼうとしたとき、女に喚かれ、思いを果たすことができず、ただもう無我夢中となりまして、淫、つまり精液も女の体の際やらその辺りやらに零してしまいました。

『新約聖書』の福音書記者たちは、性については稀に、それもごくさりげなくふれるのみであった。が、一夫一婦制の大切さを説き、不貞を厳しく糾弾することには熱心であった。聖マタイは書いている。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」と(「マタイによる福音書」5:27-28)。他人の妻に対したとえ単なる欲情を抱いただけでも、それは不貞行為にあたるといのである。

コリヤード『懺悔録』に見える一男性信徒による次の告解は聖マタイの戒める罪に言及したものとすることができる。

Sono foca, mime catachi no ioi vonna vo miru tabi goto ni acunen ga vocotte, sôbet are to gana! to nozome domo, toqi niitte va, sono mōnen vo farôte fuxegui marasuru. Dôxin xita no cazu va voboie maraxenu. Xicamo vonango no teitô xindai va, me ni cacari xidai de gozaru.

その外、^{ほか}貌・^{みめ}姿・^{かたち}を^{をんな}のよい女を見る度ごとに^{そうべつ}悪念が起こって、^{をなご}惣別あれとがな!と望めども、時によつては、その^{まうねん}妄念を^{どうしん}払うて防ぎまらす。同心したの数は覚えませぬ。しかも女の^{しだい}梯磴・次第は、目に懸かり次第でござる。

そのほか、見目・容のよい女を見るたびに良からぬ想念が起こりまして、大抵の場合それと致したい!と望むのですが、ときには、そうした妄念を振り払って罪に陥ることをみずから防ぐこともございます。しかし、そういう悪念

に屈服したことはその回数があまりに多く、覚えてさえおりませぬ。欲望のままに女との情事に耽った順序は、相手の女が私の目に入った順序のままと申し召してください。

『懺悔録』には一女性信徒の次のような告解が見える。

Mata uaraua, uotoco iori mime catachi no iô utçucuxij uonnato fomeraruru toqi va isami iorocobi, mata qini ai, ioi uotoco no tçuqiai no jibun niotte mo, xinjit cara netacatta coto mo sando gozari, dôxin xeide, tada ua sora ni sô moxita coto mo xetxet de gozatta.

また、^{わらは}妾、男より^{みめ}貌・^{かたち}姿のよう美しい女と褒めらるる時は^{をんな}勇み悦び、また気に合ひ、よい男の^{しんじつ}附合ひの時分によっても、真実から寝たかったことも三度ござり、^{どうしん}同心せいで、^{そら}ただは空にさう申したことも^{せつせつ}節々でござった。

男より見目・容貌の美しい女よ、と褒められるたびに心勇み悦びを覚える私でございましたが、自分の気に入った良い男に出逢うたときなど、心底これと寝たいと思うたことが三度ございました。男から誘われても同意せず、しかし言葉のうえだけで「寝たい」と申したことはしばしばございました。

聖マタイの言葉とは立場が逆転してはいるが、この懺悔は、みだらな心宛てをもって異性を眺めた罪科に言及したそれであるといえよう。

聖ルカは「妻を離縁して他の女を妻とする者」も、「離縁された女を妻とする者」も、姦通の罪を犯すことになる」と述べた（「ルカによる福音書」16:18）。聖パウロは、神への奉仕を全きものとするためには独身でいるほうが望ましいとの立場から、結婚をとめどもない肉欲に溺れるのを防ぐための窮余の一策にすぎぬと考えた。彼の言い分はこうである。「男は女に触れない方がよい。しかし、淫らな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、女はめいめい自分の夫を持ちなさい。夫は妻に、その務めを果たし、同様に妻も夫にその務めを果たしなさい。〔中略〕未婚者とやもめに言いますが、皆わたしのよう独りであるのがよいでしょう。しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましだからです」（「コリントの信徒への手紙一」7:1-3, 8-9）。

中世以降、カトリックの掟は、婚姻の秘蹟によって契り合った一夫一婦の間で、子を儲けるという目的をもって行なわれる性交のみを是と認めてきた。倫理神学の見地から要求される正しい性交とは、したがって、正式の夫婦の間で、「精液が男根の十分な突入によって十分な分量女性器官の中に放射され得るやうに」（上智大学編『カトリック大辞典』Ⅲ、富山房、1952年、555ページ）行なわれるものでなければならなかった。この条件を満たさぬ性行為はいっさい禁ぜられ、禁を犯した者は司祭にその罪を懺悔せねばならない。性行為の唯一正当な目的を子孫繁栄のみに限るといっているのであるから、きちんと



図8 マタイ伝の教えも一般日本人の感覚では……。サトウサンペイ『フジ三太郎』（1971年5月22日『朝日新聞』朝刊）より。

した夫婦間で行なわれるにせよ、必然的に、月経時（「レビ記」18:19参照）・妊娠中・授乳中の行為も禁ぜられることになる(*)。

(*) 罪と贖罪のリストである贖罪規定書のうちもっとも広く用いられ各地に普及して影響力の大きかったのが、ヴォルムスの司教ブルカルトゥスの贖罪規定書であった。1008年から12年にかけて書かれた「教令集」第19巻に収められたこの贖罪規定書の中で著者は、結婚における性交渉の目的を論してこう記す。

「お前の妻、あるいは別の女と犬のようにうしろから交接したか？ そうしたなら、10日間パンと水だけの償いをせよ」

「妻が月経のときに交接したか？ そうしたなら、10日間パンと水だけの償いをせよ。お前の妻が出産後、血を清めないうちに教会に入ったなら、教会から身を遠ざけていなければならない日数と同じだけ償いをせよ。それらの日にお前が妻と交わったなら、20日間パンと水だけの償いをせよ」

「子供が子宮の中で動いたのち、あるいは少なくとも出産前40日以内に妻と交わったか？ そうしたなら、20日間パンと水だけの償いをせよ」

「受胎の兆候が現われたのち妻と交わったか？ 10日間パンと水だけの償いをせよ」

「主の日に妻と交わったか？ 4日間パンと水だけの償いをせよ」

「四旬節に妻と汚れた行為をしたか？ 40日間パンと水だけの償いをするか、施しとして26スー支払わなければならない。お前が酔っているあいだにそれがおきたなら、20日間パンと水だけの償いをせよ。貞節を守らなければならない日は降誕祭前の20日間、毎日曜日、法で定められたすべての断食期間、使徒の誕生日、主要な祭日、さらに公共の場所でも身を慎まなければならない。もしそれを守らなかったならば、そうしたなら、40日間パンと水だけの償いをせよ」（ジャン・ヴェルドン『図説 快楽の中世史』池上俊一監修、吉田春美訳、原書房、1997年、110～111ページ参照）。

蓄妾

正室のほかに側室を持つこと、つまり妾を囲うことは、トリエント公会議(1545-63)が明確に宣言した婚姻の二大原則——すなわち婚姻の単一性と不解消性——のうちひとつに背反する行為となる。婚姻の単一性とは要するに、れっきとした(つまり、恩寵伝達の第七の sacrament, すなわち婚姻の秘蹟によって契り合った)奥方はただひとりでなければならず、愛人だの妾だのは決して持つてはならない、そしてその婚姻はどちらかが死ぬまで原則として解消されてはならないというのだ。

コリヤード『懺悔録』に見える一男性信徒の懺悔の全文を次に示す。

Soregaxi nhôbô vo mochi nagara, chicazzuqi mo mochi maraxita. Sono tecaqe mo votto no aru mono de vogiaru. Sô gozareba, futasama no samatague ga atte, nozomi no mamani sore to toga ni vochi maraxeide, tada chôbi xidai ni itaxi maraxita. Cazu va ie voboie nedomo, fitotçvqi ni va, ni sando mo ari, ichido mo ari, nai coto mo gozaru. Mata nuxi no votto rusu de gozaru toqi va, fi vo tçuzzuqete saisai vocaxi marasuru. Tocacu xiavaxe ni ai iori maraxita. Sari nagara, jacufai no toqi cara sono vonago vo mixitta tocorode, qiga amari sore ni tçuqi maraxite, farubaru no coto nareba, confession no jibun ni padre sama iori, tocacu sore vo iamei, cutto saxivoqe to vôxerarete, micata cara mo zuibun chicara no voiobi, mofaia catçute aru mai to sadameta redomo, iouai mono nareba sono nochî casane gasane ni vochi maraxita. Core va mō xichi fachi nen no coto de gozaru niiotte go suiriō mesareio. Cono vchi ni chiguiro no ioi xiauxaxe ga nai toqi va, sore ni xitagatte nari xidai sono gotai ni te vo caqe, cuchi vo sui, idaqi, fagi vo saguru coto tô va vomô mama ni xi marasuru. Tocacu mi ni macaxete iraruru to cocoroie saxerareio. Mata fûfu no chiguiro no jibun nimo ano vonna ni nen vo caqete naita coto va dodo gozatta. Mata sôbet

xōtocu no michi iori de gozatta redomo, nisando va vxiro, vel, xiri cara votoxi mataxita. Sono vie, sono vonago coto voba vomoi idasu tabi gotoni, isami iorocobi, sono nagori voxī sa de vonozzucara mo in ga more, tezzucara mo moraxi maraxita. Core va maie no confession no igo xichi fachijū do de gozarō made.

某^{それがし}女房を持ちながら、近付き^{ちかづ}も持ちまらした。その妻も夫の有る者^{てかけ}でおぢやる。さうござれば、二様の妨げ^{ふたさま}が有って、望みのままにそれと科に落ちまらせいで、ただ調備次第^{てうびしだい}に致しまらした。数はえ覚えねども、一月には、二・三度も有り、一度も有り、無いこともござる。また主の夫留守でござる時は、日を^{つづ}続けて細々犯しまらす。とかく仕合はせにあひよりまらした。さりながら、若輩の時からその女を見知ったところで、気があまりそれに付きまらして、遙々^{はるばる}のことなれば、コンヒサンの時分に、パテレ様より、とかくそれを止めい、くつと閣^{さしお}けと仰せられて、味方からも、随分力の及び、もはや曾て有るまいと定めたれども、弱い者^{おほ}なれば、その後重ね重ねに落ちまらした。これはもう七・八年のことでござるによって御推量^{ごすいりやう}めされよ。この中に、契りのよい仕合はせが無い時は、それに随ってなり次第その五体に手を掛け、口を吸ひ、抱き、恥^{はぢ}を探ること等は思ふままにしまらす。とかく身に任せて居らると心得させられよ。また夫婦の契りの時分にも、あの女に念を掛けて為いたことは度々^なござった。また惣別生得^{そうべつしやうとく}の道よりでござったれども、二・三度は後^{うしろ}、(または)臀^{しり}から落としまらした。その上、その女事^{をなごこと}をば思ひ出す度ごとに勇み悦び、その名残惜^なしさで自らも淫が漏れ、手づからも漏らしまらした。これは前のコンヒサンの以後、七・八十度^{しち はちじふ}でござらうまで^ど(*)。

私、女房がおりながら、「近付き」すなわち妾を囲っておりまして。その妾というのも夫のいる身でございます。私には女房がおり、女には夫がいるというわけで、双方にとって二重の障害が生じ、私としても、望みのままに女と罪に落ちるわけには参らず、ただ好機があればそれに乗じて致しておりまして。回数は覚えておりませぬが、一月に二、三度のこともあり、ただ一度のこともあり、全然致さぬこともございました。ただ、女の夫が留守であるときは、連日連日繰返し犯します。とにかく機会があればそれに乗じて致すというありさまでした。その女は若い時分からよく見知っておりまして、これが気になって仕様がないう状態は遙か以前より続いております。されば、コンヘションに際して、パードレ様は、とにかくその状態を断ち切れ、きっぱり女とのことを断念せよ、とおっしゃいます。私としてはずいぶんと努力もし、もはや決してさような科を犯さぬと心に決めるのですが、心弱い者でありますから、その後、性懲りもなく重ねて科に陥りました。かような状態になってもう七、八年は経っておりますから、私の罪深きこと、御推量にお任せ申します。思うように犯せぬときでも、欲望の赴くまま、できる範囲内で、女の五体に手を這わせ、口を吸い、抱き、恥部をまさぐるなど、思いのままでございます。ともかく女は一切を私の思いのまに委ねていると、思し召し下さい。夫婦の営みも、あの女とのことを思い出して致すことがたびたびでした。その夫婦の営みですが、大体は自然のやり方によりましたけれど、二、三度は相手が嫌がるにもかかわらず、後ろ、つまり臀から致してしまいました。そのうえ、そうした情交を思い出すたびに興奮し悦びを感じ、それを名残り惜しく思うあまり、おのずと淫液が漏れ、手で扱いて漏らしもしてしまいました。前のコンヘション以降、七、八〇度もこんなことがありましたか。

(*) この懺悔は、蓄妾以外の性的逸脱の問題をいくつか内包している。たとえば、「また惣別生得の道よりでござったれども、二・三度は後、(または)臀から落としまらした」というくだり。これは「味方から、臀よりすれば身持ちにならう気遣いがないと勧めて、若道のやうにそれと度々寝まらしてござる」という、すでに引用した女性信徒の懺悔に照らすと、アナルセックスの“罪”を懺悔していることになる。素直に読めば、後ろから「犬のように」女性を

犯したことを懺悔しているようであるが、そうではなく、ここでは肛門性交を妻に強いたことを懺悔しているものと見る。これより先は余談の余談。後背位から射精したとて妊娠するときは妊娠するのであるから、いかなる体位による性交も、相手が妻であり、子作りという意図を伴っている限り、カトリック倫理には抵触せぬではないか、と一瞬思う。が、そうではないのである。中世初期の神学者は性交時の体位の問題にまでいろいろとうるさく干渉したからだ（これについてはヴェルドン『図説 快樂の中世史』70～75ページ参照）。

体位うんぬんの一件、あまり深入りすると際限がなくなるので、蓄妾のことに戻る。

キリシタン宣教師が活躍した戦国末期から江戸初期の日本社会は、前述のようなカトリックの婚姻観——単一性と不解消性——とは真っ向から対立する価値観を内包していた。特に武家社会では、家の存続という目的から、子を生む道具としての妾の必要性が強調された。特に徳川幕藩体制下において諸大名は、相続人断絶による家禄召し上げを極度に恐れた。正妻が男子を生さぬ場合、諸大名は側室つまり妾奉公人の生んだ男子を家督相続人として幕府へ届け出ることによって、お家の取り潰しを免れようと努めた。「腹は借り物」という日本語が生まれたゆえんはそこにあり、古川柳にも「大名の借りる道具は腹ばかり」とある。

おびたしい側室を抱えながらまともに子孫を遺せなかった豊臣秀吉は、1586年4月1日(天正十四年二月十三日)に大坂の教会を突然訪問したとき、次のようなことを口走ったとフロイスは伝える。曰く、「もし貴殿(=宣教師)らが、多くの婦人をかかえることを禁じさえしなければ、予はキリシタンとなるのに別に支障ありとは考えておらず、その禁止を解くなら予も(キリシタンに)なるだろう」(Luís Fróis, *Historia de Japam*, V, José Wicki ed., Biblioteca Nacional de Lisboa, pp.234-235. レイス・フロイス『日本史』1, 松田毅一 川崎桃太訳, 中央公論社, 1977年, 214ページ)。

この秀吉の言葉など、たとえ実際にそう述べたとて出任せの冗談に決まっているが、より問題なのは、キリシタンに改宗した後のバルトロメウ大村純忠のケースである。

永禄六年(1563)日本の大名として初めて洗礼を受けた純忠は、諫早西郷氏から迎えた正室のほか後妻・側室との間に四男七女を儲けている。純忠が受洗の前後にも側室を抱えていたことは、子供たちの生年とそれぞれの生母名から推定できる。イエズス会士としては、日本におけるキリシタン大名第一号の寵愛を失いたくないあまり、純忠に洗礼を授けるにあたって、おそらくは側室の存在を知らずしてそれを見逃し、その後も黙認の姿勢をとり続けた、と解してよいようである(高瀬弘一郎『キリシタンの世紀——ザビエル渡日から「鎖国」まで』岩波書店, 110ページ参照)。

宣教師が日本の性習俗と向き合うにあたり、蓄妾の習俗こそ、もっとも厄介で解決しにくい問題であったであろう。先述のとおり、家系保持のために妾の必要性が当然視されている時代である。しかしながら、いやしくもキリシタン大名である以上、正室が男子を生さぬ場合でも、それを理由に正室を離縁するわけにはゆかない(少なくとも理念上は)。ところが世継ぎのないまま一夫一婦制と離婚禁止の掟を後生大事に守っていれば、お家断絶・家禄没収の憂き目に遭う可能性が大である。キリシタン大名といっても堅固にして純正な信仰の持ち主はごくわずかであったようだが、彼らが上述の掟に真摯に耳を貸さなかったのには実に無理からぬ事情があった。ジュスト高山右近のように自己の世俗的破滅を怖れず頑として信仰を守り通した大名などわがキリシタン史において例外中の例外であったことを忘れるべきではない。

自慰

『日葡辞書』にはオナニズムを意味する語彙がふたつ採録されている。ひとつは和語系統の Xenzuri (せんずり) であり、いまひとつは漢語系統の Iiin (自淫) である。いずれも「自分の手によって行なう

精液の射出」(*Pollução feita por suas mãos*)と定義されている。Iiin は今と同じく「ジイン」であるが、17世紀初め、Xenzuri のほうは「シェンズリ」と発音されていた。

よく知られているように、手淫をオナニーというのは「創世記」に見える次の説話に由来する。オナンはユダとカナン人女性の息子(38:4)。オナンは兄の死後、兄嫁、つまり義姉のタマルと姻戚結婚して、兄の子孫をつくるようユダから命ぜられる。ところが「オナンはその子孫が自分のものとはならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないように、兄嫁のところへ入る度に子種を地面に流した。彼のしたことは主の意に反することであつたので、彼もまた殺された(*)」(38:9-10)。

Xenzuri . I , liin. Pollução feita por suas mãos.
Xenzuriuo cacu. Ter pollução.

図9 『日葡辞書』に見える「せんずり」または「自淫」の説明。次のように記述されている。*Pollução feita por suas mãos*. [自分の手によって行なう精液の射出] Xenzuriuo cacu. (せんずりをかく) *Ter pollução*. [手淫をする]

(*) 本稿における『聖書』からの引用はすべて新共同訳を利用する。新共同訳は現在の読者をもっとも信をおきうるものなのであろうが、この「彼もまた殺された」というくだりなど、私にはオナンが主なる神の手に直接かかって殺されたようにしか読めない。しかしこの動作主体は「神」であって、「殺された」は神の行為の尊敬語なのである。試みに、ポルトガル語の新共同訳によって訳してみると「オナンが死ぬよう神が計らい給うた」となる。少なくともニュアンスにおいてこのふたつは全然別物である。『聖書』の和訳のうち、イメージ喚起力と格調、さらに簡潔さにおいて、私は明治十三年の訳に手を入れた大正六年の聖書協会文語訳がもっとも優れていると思うが、今ではもうそんな反動的(?) 好みに拘泥するわけにもゆくまい。しかし新共同訳でどうしても辛抱ならないのが、尊敬(のつもり)の助動詞「れる」「られる」の頻出であり、私にはこれがすこぶる目障り、かつ耳障りだ。少なくとも私はそういう「れる」「られる」の使用を最小限に抑えたい。「される」だの「言われる」だの「食べられる」だの「来られる」だの「見られる」だの、尊敬語としては話し言葉でさえとうてい使う気になれない。これらに対応する尊敬動詞を知らぬのなら何をかいわんやであるが、「れる」「られる」が受身なのか尊敬なのか判然とせぬとき、この「彼もまた殺された」というくだりがそうであるように、文章の理解にはっきりと実害が及ぶ。「オナンが死ぬよう神は計らい給うた」と訳すことにどういう不都合があるのか、私にはわからない。

このことから手淫をオナニーと称するわけであるが、オナンの行為は実は単なる手淫ではなく、義姉を相手に行なった膣外射精であると考えられている(『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年、257ページ)。であれば、本稿で考える性的逸脱の分類(本稿91～92ページ参照)では8の範疇(すなわち産児制限)に入ることになる。

自慰のもっとも普通の様態は手淫であろうが、これは神学者によって、「外的手段により、又は邪淫に関はる慾表象(心理的自瀆)の方法により、自由意志を以て性的自己満足を求め性的器官の刺激を誘ふこと」(上智大学編『カトリック大辞典』II, 富山房、1942年、486ページ)と定義づけられる。

『懺悔録』には紛れもなき自慰行為——つまりオナンが義姉に対して犯した罪とは趣を異にする、ただ無駄に胤を流すだけの行為——に対する懺悔が見える。「その上、その女事(=自分の妻を肛門から犯したこと)をば思ひ出す度ごとに勇み悦び、その名残惜しさで自らも淫が漏れ、手づからも漏らしまらした。これは前のコンヒサンの以後、七・八十度でござらうまで」という告解はすでに引用したが、別の一信徒もかなり長い懺悔の中で手淫についてふれ、

Xicarú tocoroni, maie no confession no nochi, tezzucara mi vo momi atçucôte in vo nagaita coto, xigueô gozatta. Mata votoco to tagaini fagi vo motaxete, moraxi morasuru coto mo figoto ni aru.

しかるところに、前のコンヒサンの^{のち}後、手づから身を^も揉み^{あつか}扱うて淫を流いたこと、^{しげ}繁うござった。また、男と互ひに恥^{はぢ}を持たせて、漏らし漏らすことも日ごとにある。

前のコンヘションの後、手づから体を揉み扱うて淫を漏らすことが頻繁にございましたが、男と互いに恥部を持ち合い、漏らしたり漏らさせたりすることも、毎日のようにございました。

と述べる。「男と互ひに恥を持たせて、漏らし漏らす」という行為は隠語で「相かき」と呼ばれた(樋口清之『性と日本人』[『日本人の歴史』4]講談社、1980年、「資料——性に関する隠語」参照)。

自慰は男性だけの専売特許ではない。女性信徒、それも貞潔の誓願を立てたはずの婦人が自慰に耽ったことを次のように懺悔する。

Varera fubon no guan no mono de gozaru vo Christian xu mina xirarete, ienpen no sata sucoxi mo gozaraide, iocoxima no nen ga qizasú toqi va, mi vo xexxite nari tomo fuxegu coto mo ari, mata amari qitçũ sono mōnen ni vocasaruru toqi niotte va, ie fuxegui todoqeide, mi vo caqi saguri, ano cata ni iubi vo saxi ire, votoco to nete voru furi vo itaite, xi go rocudo sono inracu vo togue fatasu iōni mi vo igoqi vocoxi maraxita.

我等不犯^{ふぼんぐわん}の願の者でござるをキリシタン衆皆知られて、縁辺^{えんぺん}の沙汰少しもござらいで、邪^{よこしま}の念が萌^{きざ}す時は、身を接してなりとも防ぐことも有り、またあまりきつうその妄念^{まうねん}に犯さるる時によっては、え防ぎとどけいで、身を搔き探り、あの方^{かた}に指をさし入れ、男と寝て居るふりを致^をいて、四・五・六度その淫楽を遂げ果たす様に身を動き起こしました。

私どもが貞潔の誓願を立てた者であることは、キリシタンの衆には知られており、「縁辺の沙汰」、つまり縁談など少しもございません。で、邪の念が萌すときは、わざと体を苦しめてそれを防ぎます。しかしながら、あまりにもきつうそうした妄念に苛まれたときは、悪念を防ぎとめることができずに、体を搔き探り、秘所に指をさし入れ、男と寝ているふりを致して、体を動かせ起こして、その淫楽を遂げ果たそうとしたことが四、五、六度ばかりございました。

時代はさかのぼって奈良時代、平城京における性は、悪くいえば無秩序、良くいえばきわめておおらかな古代的なごりをとどめたものであった。が、それでも男縁に恵まれぬ女性は、独活蔓^{うどかずら}を男根形に削った自慰具を愛用することがあった。平城京遺跡をはじめ、宮城県多賀城市・静岡県浜松市からもその種の自慰具が発掘されたのだそうである。江戸期には張形^{はりがた}とよばれる自慰具が案出された。張形は上等なものは鼈甲^{べっこう}製、一般的には水牛の角製であり、主として大奥の女性たちに利用された(樋口『性と日本人』84～89ページ参照)。前掲の懺悔に現われる自慰行為は文面に明らかなとおり道具をもって行なわれたものではないが、そのために罪の程度が軽減されることはないであろう。

もっとも中世初期キリスト教における贖罪規定書では、自慰はさして重大な罪とは見なされていなかったようである。特に女性の自慰行為はいくつかの理由から大目に見られる傾向が強かった。その

理由のひとつを、ジャン・ヴェルドンは男性の射精と女性のそれとが等価ではなかったことに求める。男性の精液が子供の胤であり、これを無益に放出することは種の喪失という観点から罪となるのに対し、女性の精液はといえば、性交時の苦痛を軽減する役目しかなく、社会的には女性が重大な危険に陥るのを防ぐ役割を持つ。なぜなら、夫が戦争・巡礼・商用のため旅に出ている間、留守宅の妻が行なう自慰は「純粋な家系を守る保証」となったからだ、とジャン・ヴェルドンは記す（『図説 快楽の中世史』82ページ）。

男性の手淫のことに戻ると、西暦595年に没したヨハネス・イエユナトルの『懺悔規定書』には、手淫にふたつのタイプがあると記されている。ひとつは自分の手によるもので、もうひとつは他人の手によるもの。後者については最初こそ内輪だけで行なっているが、やがては自分たちからその悪習を学んだ者が堕落するそのきっかけを作るがゆえに、よりいっそう悲惨であると（ジョン・ボズウェル『キリスト教と同性愛——1～14世紀西欧のゲイ・ピープル』大越愛子 下田立行訳、国文社、1990年、364～365ページ参照）。

前掲『懺悔規定書』がより罪深いものとする「手淫教唆」に関する一信徒の懺悔もおもしろい。曰く、

Soregaxi, iocoxima no michi uo mi xiranu uosanaï mono ni tezzucara no inracu uo catari, xiiô uo made mo uoxiie susumete, sono acu uo uocasaxe maraxita.

^{それがしよこしま}某、邪の道を見知らぬ幼い者に手づからの淫楽を語り、^{しやう}為様をまでも教へ勧めて、その悪を犯させました。

私、邪の道を未だ知らぬ幼い者に手ずからの淫楽、つまり自慰行為について語り、そのやり方までこれに教え勧めて、この悪を犯させました。

Naxocu . Peccado mao , ou nefundo.

図10 『日葡辞書』に見える「男色」の説明。

**NHacudô . Vacaxuno michi . Sodomia ,
ou peccado mao . q Nhacudôuo tatçuru .
Ser paciente neste abuso , ou peccado
mao , como por officio .**

図11 『日葡辞書』に見える「若道」の説明。次のように記述されている。Vacaxuno michi. (若衆の道) Sodomia, ou peccado mao. [男色, あるいは, 悪しき罪] Nhacudôuo tatçuru. (若道を立つる) Ser paciente neste abuso, ou peccado mao, como por officio. [このような悪い行為, 悪習の中で, 役目として受け身になる]

男色

『日葡辞書』には男同士の性交渉を意味する語彙が二例見える。ひとつは Nanxocu (男色) であり、いまひとつは Nhacudõ (若道) である。それぞれ「ナンショク」「ニャクダウ」と発音されていたであろう。Nanxocu が「悪い、口にすべからざる罪惡」(*Peccado mao, ou nefando*) と間接的に説明されているのに対し、Nhacudõ は「男色、あるいは悪しき科」(*Sodomia, ou peccado mao*) と、ソドミーアという語彙を用いてよりはっきりと説明されている。

『懺悔録』にはひとつだけであるが、男色に耽る男の告解が載録されている。男色に関する箇所(下線部)はさして長くはないが、前後ともども示す。

Vare va goronjeraruru gotoqu, vacai mono de gozatte, sono uie Christian no catagui mo mada xicato mi ni tçucanu tocorode, tçune no tomo mo dôrui no mono de gozareba, go suiriõ saxerareio. Tocacu itazzura ni io vo suguite, renga no vta vo tçucuri, jõgiũ fudan no monogatari mo sono cata ni cocoro vo fiqi ioxe, tçuini Deus no go fatto, von imaxime, von vosore nitçuite nenqi mo gozaraide, chicuxõ no iõni xiqitai no miguruxij mono ni tõi giacu xite ita tocorode, nen mo cotoba mo xosa mo cotogotoqu sono nemoto cara ideqi mono de gozatta. Sore nitçuite nhacudõ no nozomi ga vocoru toqi va sonomama xiavaxe vo ucagõte, foxij mama ni tçutome, ioi vonna meni cacaru toqi mo, xemete xinjit no cocoro no dôxin to, mata xei vo irete motomuru made iameide, ficqiõ nanigoto ni tçuqete mo, tare nimo xitagavaide toga bacari foriidaxi maraxita.

我は御覧ぜらるる如く、若い者でござって、その上、キリシタンの形儀もまだしかと身に付かぬところで、常の友も同類の者でござれば、御推量させられよ。とかく徒に世を過ぎて、連歌の歌を作り、常住不斷の物語もその方に心を引き寄せ、終にデウスの御法度・御禁め・御畏れについて念気もござらいで、畜生の様に色体の見苦しいものに貪着して居たところで、念も言葉も所作も悉くその根元から出来ものでござった。それについて、若道の望みが起こる時は、そのまま仕合はせを窺うて、恣に勤め、よい女目に懸かる時も、せめて真実の心の同心と、また精を入れて求むるまで止めいで、畢竟何事に就けても、誰にも随はいで科ばかり掘り出しました。

私は御覧のとりの若輩者でございまして、そのうえ、キリシタンの日常のお勤めもまだしっかりと身についておりませぬ。普段つきあっている連中も同類でございますから、私の不信心ぶりについては御推量にお任せ致します。とかくキリシタンとしてのお勤めを怠り、無為に日を送りまして、連歌などに耽り、平生話題にすることもそちらのほうばかりでございます。デウスの御法度・御誡め・御畏れについて気に懸けることもなく、畜生さながらに、醜い肉欲に執着しておりましたので、思うこと、言うこと、為すことのすべてが、右に述べたようなことに淵源するといふありさまでした。それに関して、男色に耽りたいという欲望が起こるときは、そのままその好機を窺い、欲しいままに淫欲を満たすことに勤めました。また、誰か美しい女に眼に入りますと、その女が真実私と心を通わせたいと科に落ちてくれるのを待ち望みつつ、この女を落とすまでは決して後へは退かぬ、と一心不乱、執拗に執着いたしました。結局、何事につけ、誰の言うことにも随わず、悪行をし遂げることにはばかりかまけておりました。

それにしても男色をふくめた種々の罪を「掘り出しました」とは。これを信徒の言語感覚の豊かさ、もしくは遊び心の現われと見るのは私の妄想過剰か。

『懺悔録』に現われる男色者の告解はおそらく武士階級のそれではまなく、ましてや日本最大の男

色愛好者集団，すなわち坊主のものでもなかろう。ごく普通の庶民の慰み事であった様子は種々の外国人観察者の記述からもうかがうことができる。

享保四年(1713)，徳川吉宗の將軍襲職を賀するため来日した朝鮮通信使の製述官申維翰は日本人の男色趣味について驚きをこめ次のように記す。

「日本の男娼の艶は，女色に倍する。人の気にいられ人を惑わすこともまた，女色に倍する。〔中略〕国君をはじめ，富豪，庶人でも，みな財をつぎこんでこれを蓄え，坐臥出入のときは必ず随わせ，耽溺して飽くことがない。あるいは，外に心が移れば嫉妬して人を殺すことさえある。その国俗として，人の妻妾を窃取する事は易いが，男娼には主があり，あえてこれに話しかけたり，笑いかけることもできない」(申維翰『海游録——朝鮮通信使の日本紀行』姜在彦訳注，平凡社東洋文庫，1974年，315ページ)

フロイスが『覚書』において日本人の男色に言及するのは次の二項である。

「我らの教師は子供たちに(カトリックの)教義や，神聖にして有徳な習慣を教える。坊主らは彼らに弾奏・唱歌・遊戯・剣戟を教え，彼らと嫌悪すべきことを行なう」(III:10. 下線引用者)

「我らにおいては，(修道生活に入ると)ただちに靈魂の清浄と，肉体の純潔を誓う。坊主らは，あらゆる内面の汚穢と，肉体の忌まわしい全罪惡を誓う」(IV:2. 下線引用者)

下線を付した「嫌悪すべきこと」や「肉体の忌まわしい全罪惡」とは，まぎれもなく男色(*)を指す。

(*) イエズス会が日本のコレジオやセミナリオで教理教育のテキストとして用いた「日本のカテキズモ」は男色の罪について次のように説く。「日本ノ教，寺家，社家ニ，罪深キ不浄ノ汚レアリトテ女人ヲ嫌フカトスレハ，若道ト号シテ男子ノ色ヲ用ル事，其道，至極ノ大悪行是ナリ」。続いて「男子ノ身トシテ男子ニ戯レヲナス事重罪ナル謂レハ」と述べて，男色が罪とされるのはなぜかを説く。それは，この行為が「人間に定まる生得の理に背く甚だ無道なる事」であるから，つまり「コントラナツラル」(自然に反した)の所業であるからだという。「然ルニ」と「日本のカテキズモ」は続ける。「若道ハ繁昌ノ為ニ曾テ非ス。却テ障ナル寸ンハ，即，生得ヲ背ク無道ノ惡ナリト知レタリ」。すなわち，性交の唯一正当な目的である子孫繁盛のため，男色はなんら役立たぬのみか，かえってその障害にさえなる。そして男色はこれを「天理ノ法ヲ越，畜類イニモ劣ル無道ナル重罪」とし，「諸国ノ人々，是ヲ不浄ノ重科トスル事，最モ道理至極ナリ」と結論づける(海老沢他編『キリシタン教理書』242～243ページ)。

ザビエルの山口布教を保護した大内義隆もまた，男色という「自然に反する破廉恥な罪惡」に溺れているひとりであった。ザビエルは義隆に快く引見されたその席で，日本人が耽っている「ソドマの罪」つまり男色の悪習に言及し，「そのような忌むべきことをする人間は豚よりも汚らわしく，犬その他理性を備えない禽獣より下劣である」と言い放った。義隆はこの教えに対する「激昂」を面に表わし，ただちにザビエル一行の退室を命じた(Luís Fróis, *Historia de Japam*, I, José Wicki ed., Biblioteca Nacional de Lisboa, p.32. ルイス・フロイス『日本史』6，松田毅一 川崎桃太訳，中央公論社，1978年，54～55ページ)。

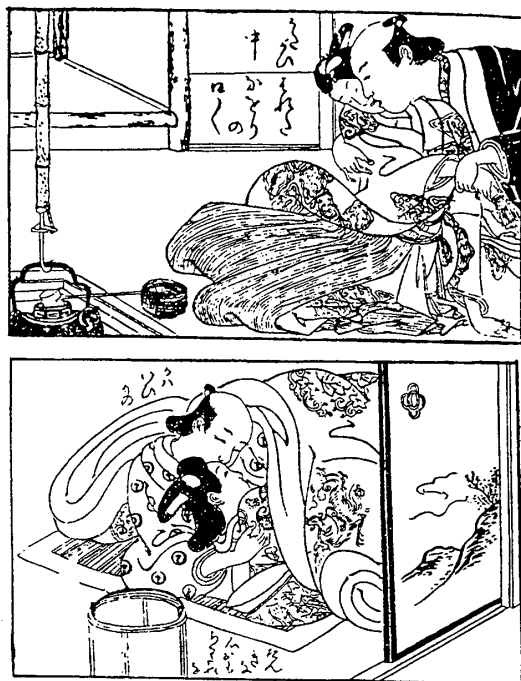


図12 『男色山路露』。上「茶による恋」，下「おもひ恋」。氏家幹人著『武士道とエロス』より。

キリシタンの京都布教の大パトロンとなった織田信長の寵童趣味は有名であるし（信長から愛顧されたフロイスが『日本史』において信長の男色に一言半句もふれていないのは、思うに、ヨーロッパ・キリスト教世界へ伝えるべき、キリシタン宗門の“大檀那”信長の光彩陸離たるイメージを損なわぬようにするための一種の教化的配慮ではなかったであろうか。記述の詳細さに異常な情熱を注いだフロイスが、自ら当然知っていたはずの信長の寵童趣味にまったく言及していないのは、不自然きわまりないことである）、武田信玄の若道趣味にいたっては、それが文書面からも立証されるという点で貴重な例であるとされる。すなわち信玄が晴信と名乗っていた頃（1536–59）、愛する少年に宛てた自筆の誓文が現存しているのである。少年の名は春日源助、後の高坂弾正虎綱で、文面は「弥七郎伽に寝させ候事之なく候（中略）なかんずく今夜は存じも寄らず候の事」というもの（氏家幹人『武士道とエロス』講談社現代新書、1995年、90～96ページ参照）。弥七郎に伽などは決してさせていない。まして今夜そんなことは……、というわけである。

江戸期、坊主仲間は、男色趣味のことを隠語で「天悦」、自慰行為のことを「大悦」と呼び習わしていたそう。隠語の謎解きなど無粋の極みだが、ここでは「天」と「大」の字をそれぞれふたつに分解してみてくださいとだけいっておく（*）。フロイスが『覚書』において言及した男色は、上に引用したごとく、坊主すなわち仏教僧侶のそれに限定されたようだ。

（*）京都の醍醐寺三宝院には、男色の実景そのものが描写されている卷子本『稚児草紙』（元享元年〔1321〕六月十八日、書写訖んぬ、の年紀がある）が秘蔵されている。仁和寺の御室御所に近侍する寵童の物語で、僧侶との秘戯が写實的に描かれ、当時の稚児の生態が赤裸々に描写されているという。「という」と記すのは、この作品が性格上公開を憚るもので、私自身実見したことがないからだ。

『稚児草紙』ほどに露骨ではなくとも、坊主と美しい稚児との恋愛を描いた絵画史料は少なくない。たとえば『芦引絵』（五巻。室町時代、15世紀半ば。逸翁美術館蔵。重要文化財）には、比叡山延暦寺東塔の僧侶が、京都白河のほとりで奈良の民部卿得業の若君を見初めてからの、ふたりの恋愛が描かれる。『稚児草紙』とは異なって露骨な愛欲シーンは見られぬものの、図版に見るように、坊主の相手をして酒宴に侍る若君の美貌ぶりはその眉墨・明眸・可憐な唇などにうかがうことができる（小松茂美編『芦引絵』（『続日本の絵巻』25）中央公論社、1993年参照）。

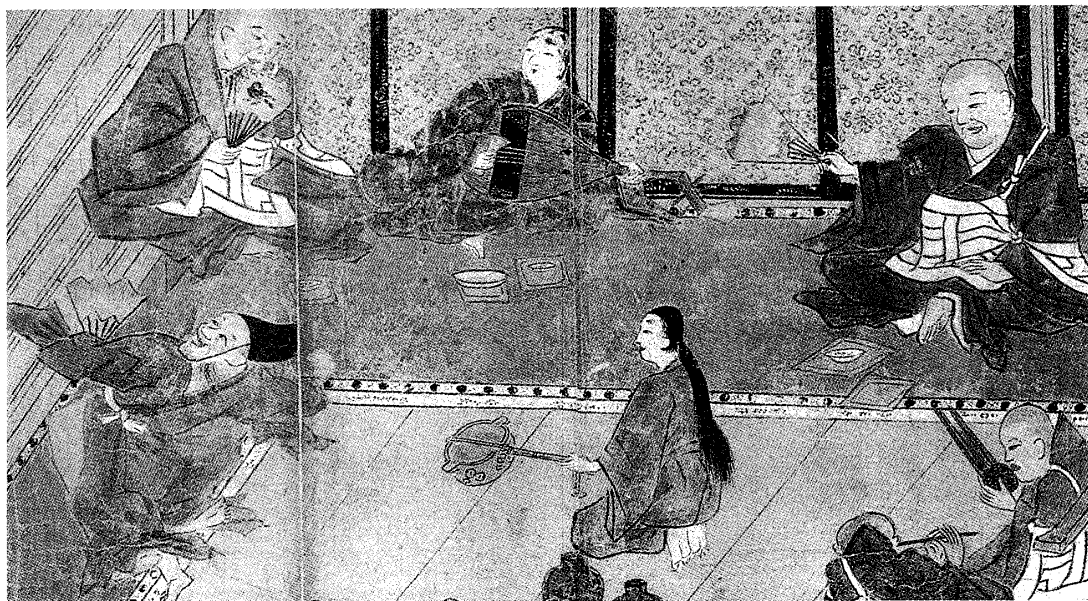


図13 坊主の相手をして酒宴に侍る美貌の稚児。琵琶を奏でている。小松茂美編『芦引絵』（中央公論社、1993年）より。

江戸期になると、男色の習俗に関し賛否それぞれの立場から議論がたたかわされるようになる。

男色を絶対に禁ずるという立場を別とすると、性行為は——男色も女色も同程度に——とめどもなく深入りするのが良くないだけであって、それぞれで身を持ち崩し、おのが家産を蕩尽してしまう、そのきっかけをつくることだけが咎められた。一般的には男色が同性間の異常な行為であるがゆえに禁ぜられたり非難の対象となったりしたわけではなさそうである。

元禄二年(1689)に上州邑楽郡大久保村(現、群馬県板倉町)の高瀬善兵衛が作成した家訓の中に、次のような箇条が見える。「一、遊女やらうのふた道并ニ博奕の中間へ引入申にハ〔中略〕とや角とする内に、けいセイがいにも野郎がいにもばくちうちにも成て、代々先祖より持来候財宝をうりうしない、妻子等にもなんぎをかくるものなり、能々此心をわきまい、前方より左様成ものにつきあい申間敷候」と。

男色は女色と合わせて二道の一方であり、野郎買いは、傾城買いや博奕と同列に見られている。ともかくこのうちのひとつにでも溺れている者とは交際してはならない、つきあっているうちにその悪風に染まり、当方の家産を蕩尽し、妻子にも多大の難儀を及ぼすと子孫を戒めているのであるが、野郎買いが同性愛という異常な行為であるがゆえに排除されるべきである、という発想は垣間見えない(氏家幹人『武士道とエロス』講談社現代新書、1995年、110～112ページ参照)。

別の観点から男色擁護論(より適切には男色放任論)を展開したのが、江戸前期の儒者熊沢蕃山(1619-91)である。その著『集義外書』の巻十において、蕃山は、師の中江藤樹(1608-48)が唱えた男色厳禁論を念頭におきつつ、男色などことごとしく言いたてるまでもない日本伝統の習俗なのであるから、放任しておけばそれでよいのだと説いた。すなわち男色を嗜好する、あるいはその経験のある者を、ただそれだけの理由で排斥・拒絶してしまつては、優れた人材をおのが学派に迎えることができなくなる。男色厳禁論は「草木の土中より生出る二葉の上に大石を置くがごと」き考え方だ、と主張したのである(氏家『武士道とエロス』115～121ページ参照)。

出羽庄内藩士小寺信正(1682-1754)は、男色者同士が結ぶ義兄弟関係の倫理的側面に注目し、より積極的に男色擁護を唱えた。「平素武人の嗜むべき事」に関する自著『志塵通』(1724年自序)において、信正は次のように述べる。「和国の風として男色盛りに行わる、別て罰文の事を用ゆ、誠を神にこらして真実の志を立、かりに兄弟と誓ひて生死を共にす、聖賢の掟に背くに似たれども、和国の風儀今すつべきにあらず〔中略〕是武国古き風なる故なるべし、なまじいの理屈を立て男色の道の理非を付る事あるべからず、神国もとよりあり来れる一つの小道なれば、其昔にならひて助置べきか、予つらつら思ふに、此道に遊ぶ人、勇をやしない武を研の一かたに近し」と。

すなわち男色は日本古来の習俗であり、とりわけ武士の世界では、男色を通じて(もっと露骨に言えばアナルセックスを通じて)義兄弟の契りを結び、生死を共にしようと誓い合うことが、勇武の心胆を練ることに役立つ。だから、いくら聖賢の道(儒教)で否定されていようとも一概にこれを非とすべきではない、というのである(氏家『武士道とエロス』142～144ページ参照)。

武士階級にとって男色とは、少なくとも理念上は、単にアナルエロティックな性の愉悦を享受するためのものではなかった。侍にとって男色における恋の相手とは「互に命を捨る後見」(『葉隠』)、つまり戦場で互いの命を賭けて助け合うパートナーなのであった。単なる肉と肉との交わりを超える、究極的な友愛に裏づけられた、しかもこれ貫くためには一命を賭すことも辞さぬ、そんな同性愛の精華(*)。侍の世界が理想と考えるそうしたホモセクシャルの世界は、南方熊楠(1867-1941)が「浄の男道」と命名して高く評価したものである(中沢新一編『浄のセクソロジー』〔『南方熊楠コレクション』3〕河出文庫、1991年、346～347ページ参照)。

(*)「肌を合わせる」や「肌を許す」という表現は、元来は、肉体関係の有無とかかわりなく、人間同士の深い絆を表わす言葉であった。このことを氏家幹人『江戸の性風俗——笑いと情死のエロス』（講談社現代新書、1998年、第六章「肌を許すということ」）は博引傍証をもって明快に説く。「肌を合わせる」は、人と人とが深く信頼し合い協力し合うこと、「肌を許す」は、ある者が他のある者に全幅の信頼をおくこと、をそれぞれ意味した。

なるほどそのような原義を踏まえれば、信長と「肌を許し」合った小姓森蘭丸が本能寺にあって奮戦し主君に殉じたことの当然さはすっきりと理解されようし（ちなみに、三田村鳶魚が引証する『疑問録』——天保四年に山崎美成が手録——には、「若道、衆道などいへるは、若衆の二字を分ち呼ぶなり、大かた上代何丸などいひて召使はるゝ、みなさる者と思はる」と記述されている由で、大体、主人持ちの美童にして何の何丸と称しておれば、大体がその方面の務めに精励する者と相場が決まっていたようだ。『花柳風俗』（『鳶魚江戸文庫』26）朝倉治彦編、中公文庫、1998年、338～340ページ参照）、将軍家光の没後、殉死を遂げた堀田正盛（1608－51）が、切腹の際、作法に反して、肌ぬぎにならなかったわけにも合点がゆく。正盛は「御蔭をも直したる者にて候間、肌を見せ申間敷由にて、肌ぬぎ不申候よし」（『葉隠』）。「御蔭を直す」とは男色の相手を務めるの意。亡き将軍とは性的関係を結んでいた身であるから、家光以外の人の眼に肌を曝すことを潔しとしなかった、というのだ（氏家『江戸の性風俗』174～175ページ参照）。

キリシタンの教理書として日本人信徒のあいだに普及した『ドチリナ・キリシタン』が16世紀末の日本人信徒に向かい、男色を「ナツラ」（自然）に背反する所業であると縷々非難したところで、わが武士階級の間には、侍同士の男色を正当化・合理化するための道徳的・倫理的コードが厳然と機能していたのである。

産児制限

13世紀の神学者は、肛門性交やいわゆる不自然な体位と同様に、中絶性交を自然に反する罪とみなした。中絶性交とは聞き慣れない言葉だが、パリ大学教授でフランシスコ会士のヘイルズのアレクサンダー（1185－1245）はその著書『神学大全』の中で、射精を中止したりヴァギナの外へ放出したりすることにより意図的に子供を作らぬように行なう性交をそう呼んだようである（この件についてより詳しくは、ヴェルドン『図説 快楽の中世史』75～80ページ参照）。

これまでにふれてきたように、子作りの意図を伴わない性行為が罪惡視されるのであるから、ひとたび宿った生命を葬り去る行為が殺人の罪と同一視されるのは当然ということになる。いわゆる受胎調節も「産めよ、増えよ」（『創世記』1:28）と命じた神の意志を冒瀆する行為となる。ちなみにカトリックが強い精神的影響力を持つポルトガルでは中絶・堕胎はごく限られた理由・事情のある場合を別として今なお非合法である。

この反キリスト教的罪惡について次のような懺悔を挙げる。女性によって避妊措置が行なわれる例である。

Vatacuxi ga varambe de futavoia vo vxinõte minaxigo ni nari maraxita. Sõ atta reba io vo suguru iõ ga gozaráide, Nanban jin iori sono togui ni torarete, nuxi no iado ni iotçuqi no aida nhõbõ no iõni vori maraxita. Sore cara, fito ni fõcõ suru coto ga mutçucaxij to qiitareba, fonxõ ga nõte, menbocu chijocu tõ vo mo xiraide, sono mama qeixei ni natte, jõrõmachi ie macari ite, vaga mi voba conomu mono ni vrimono to xite, cono sanganen no aidani vori maraxita. Cono uchi ni qirei sa no tame to, mata vazzurai ni avanu tameni, xi fatasareta votoco vo inasuru tanteqi, xõben xite ca, cutto vchi made mo nogoi saraite ca, tocacu fucuchũ ni votoco no coto ga nanimo todomaranu iõni itaxi maraxita.

私^{わたくし}が童^{わらんべ}で両親^{ふたおや}を失^{みなし}うて孤児^{みなしご}になりました。さうあつたれば世^よを過^{やう}ぐる様^{よう}がござらいで、南蛮^{なんばん}人よりその伽^がに取られて、主^{ぬし}の宿^{よつき}に四月^{しがつ}の間女房^をの様に居^をりました。それから、人^{ひと}に奉公^{ほうこう}するこ
とが難^{むづか}しいと聞^きいたれば、本^{ほん}性^{しやう}が無^なうて、面^{めん}目^{ぼく}・恥辱^{ちじよくとう}等^{とう}をも知^しらいで、そのまま傾城^{けいせい}になつて、上
郎町^{らうまち}へ罷^{まか}り行^いて、我^わが身^みをば好む者^{うりもの}に売物^{うりもの}として、この三箇年^{さんがねん}の間に居^をりました。この中に、綺
麗^{きれい}さの為^{ため}と、また煩^{わづら}ひに逢^あはぬ為^{ため}に、し果た^しされた男^{おとこ}を去^{はな}す端^{たんてき}的^{てき}、小便^{せうべん}してか、くっと内^{うち}ま
でも拭^{ぬぐ}ひ浚^{さら}ひてか、とかく腹^{はら}中^{ちゆう}に男^{おとこ}のことが何^{なに}も止^{とど}まらぬ様に致^{いた}しました。

童^{わらんべ}のとき、両親^{ふたおや}を失^{みなし}いまして、孤児^{みなしご}になってしまいました。そうですから、身過^みぎ世過^よぎの方法^{はうほう}としてはございませ
ず、南蛮^{なんばん}人に請^こわれてその伽^がに出^でることとなり、主^{ぬし}の宿^{よつき}で四ヵ月間女房^を同然^{どうぜん}で同棲^{どうせい}しておりました。やがて、真^まっ当^{とう}
な奉公^{ほうこう}は辛^{くる}く骨^{ほね}が折^おれると聞^きき及^{およ}び、分^{ぶん}別^{べつ}もなく、面^{めん}目^{ぼく}・廉恥^{れんち}さえかなぐり捨^すて、傾城^{けいせい}となり、上郎町^{らうまち}へ出^でて、わが
体^{てい}を好む者^{うりもの}を相手^{あいて}に商売^{しょうばい}しつつ、三ヵ年の間ここに留^{とど}まりました。この間、衛生^{えいせい}のため、さらには妊娠^{にんしん}の煩^{わづら}いに遭^あ
ぬよう、果^はててしまった男^{おとこ}を払^{はら}いのけたその途端^{たんてき}、小便^{せうべん}するか、すっかり中^{うち}を拭^{ぬぐ}いさらうかして、とにかく男^{おとこ}の胤^{いん}が
腹中^{はらちゆう}に留^{とど}まらぬように致^{いた}しました。

ここで「南蛮人よりその伽に取られて云々」というくだりは、上に訳載した長崎におけるポルトガ
ル人社会に関するフィレンツェ人カルレッティの観察を彷彿とさせる。事後に「小便」するか「くっ
と内までも拭ひ浚ひてか」という、およそ完全には程遠い避妊法が横行したがためであろう、長崎に
は多くの混血児が生まれた。寛永十三年(1636)、ポルトガル人と日本女性との間に生まれた男児が母
親から切り離され父親とともにマカオへ追放されたのは日葡交渉史の一大悲劇であった。

墮胎と間引きに関する別の告解を挙げる。

Sono foca : varera finnin xigocu de gozareba, co rocunin vo mochi maraxita. Sore vo sodatçuru
iõ mo gozaraide, quaitai ni naru mai tameni caracuri mo itaxi marasuru. Ichido mo quainin ni
natte cara, cusuri vo mochiite, mutçuqi no co vo voroxi, ichido mata san no jibun ni co vo fumi
coroite, fucuchũ cara xinde vmareta to mõxi maraxite gozaru.

その外^{ほか}、我等^{われら}貧人^{ひんにん}至極^{しごく}でござれば、子^こ六人^{むにん}を持^もちました。それを育^くつる様^{よう}もござらいで、懐胎^{くわいたい}
になるまい為^{ため}にからくりも致^{いた}します。一度も懐妊^{くわいにん}になつてから、薬^{くすり}を用^{もち}ゐて、六月^{むつき}の子^こを墮^おろ
し、一度また産^うの時分^{とき}に子^こを踏^ふみ殺^{ころ}いて、腹中^{はらちゆう}から死^しんで産^うまれたと申しましてござる。

私ども、至極貧乏人^{しごくひんぱん}でござれば、六人の子^こを儲^もけました。とはいえこれを育^くてるすべとしてはございませ
ず、懐胎^{くわいたい}せぬよう、いろいろとからくりも致します。あるときなど、懐妊^{くわいにん}してから、薬^{くすり}を飲^のんで六月^{むつき}の子^こを墮^おろし、また別の
ときには、分娩^{ぶんべん}後にこれを踏^ふみ殺^{ころ}して、腹中^{はらちゆう}から死^しんで産^うまれた、つまり死産^{しさん}であつたと申しましてございます。

さらにもう一例、避妊措置を施したことに関する懺悔を挙げる。

Ma ichido va, votto no aru vonago to toga ni vochi maraxite, sono votto va rusu de gozatta
niiotte, tennen qichô xerareô toqi, sono vonna quainin ni natta raba, votto iori sore vo xitte
corosareô to qizzucaï xite vomôta reba, tocacu codane ga, vel, sane, vel, in ga, uchi ni iri
tomaranu iõ ni caracuri itaxi maraxita.

ま一度は、夫の有る女と科に落ちまらして、
その夫は留守でござったによって、天然帰朝せ
られう時、その女 懐妊^{をなご}になったらば、夫よりそ
れを知って殺されうと氣遣ひ^{てんねん きてう}して思うたれば、
とかく子胤^{をんなくわいにん}が、（または）核^{きづか}、（または）淫^{いん}が
内に入り止まらぬ様に、からくり致しました。

別のときには、夫のいる女と罪に落ちました。亭主は
留守でありましたが、主が帰宅したときに女が懐妊して
いると万一判明したならば、それを知った主は女を殺し
てしまうであろうと氣遣うて、とにかく子胤が、つまり
精液が中に入り止まらぬよう、からくりを致しました。

遊女になった女性信徒の避妊法はあまりにもリ
アルな描写ゆえに疑問の余地はないが、別の懺悔
に見える避妊用の「薬」や、「淫が内に入り止まら
ぬ様に」行なった「からくり」が具体的にどのよ
うなものであったか、御存じの方は教えていただ
きたい。

墮胎・中絶・嬰兒殺し（間引き）は、キリシタン
教理によれば第五誡「殺してはならない」を冒す
行為ではあるが、この悪風は産児制限の問題と密
接な関わりを有するから、以下、第五誡に反する
罪の懺悔を拾ってみる。「産の時分に子を踏み殺い
て、腹中から死んで産まれたと申しまらし」た婦
人の懺悔は上に紹介したが、それとは別に二例を
挙げる。

Mata me gia mono to xichi fachido murini
fara vo tatete, ichinido va tçura vo vchi, ma ichido va bõ de tataqi, futatabi mo qetavoxi, axi de
voxí funde, quainin no mono nareba, co vo vorosaxe maraxita.

また、妻ぢや者と七・八度無理に腹を立てて、一・二度は頬を打ち、ま一度は棒で叩き、二度も
蹴倒し、足で押し踏んで、懐妊^{くわいにん}の者なれば、子を墮ろさせまらした。

また、妻女に対して七、八度ばかり理不尽にも腹を立て、一、二度はその頬を打ち、さらに一度は棒で叩き、二度
にわたって蹴倒し、足で踏みつけて、その頃妻女は懐妊の身でございましたが、子を墮ろさせてしまいました。

Mata : vaga votto va igi no varui mono nareba, mizzucara vo vttçu tataitçu xeraruru niitte,
sono co vo mōqenu tameni, mimochi ni natte cara fara vo negitte, sono co vo voroxi maraxita.



図14 子返しの図。江戸後期。大阪人権博物館蔵。胎児の
口をふさぎ、その腹部を膝で圧迫して間引きを行な
う女性。この罪を犯した女性は地獄へ堕ち、殺した
子供たちから責め苦を受けるであろうと、この錦絵
は戒める。大阪人権博物館編『ゆれる生と死の境界』
(1997年) より。

また、我が夫は意地の悪い者なれば、自らを打つつ叩いつせらるるによって、その子を儲けぬ為に、身持ちになってから腹を捻って〔「腹を捻る」が具体的にどうすることなのか未詳〕、その子を墮ろしまらした。

また、わが夫は意地の悪い者でございまして、私を打ったり叩いたり致しますので、その子を儲けぬよう、一度、妊娠してしまってから腹を捻って、これを墮ろしてしまいました。

キリシタン宣教師の書翰から、日本における堕胎・嬰子殺しに関する記事を抜き出すのもさほど困難なことではない。1560年12月1日付、ゴア発信、ゴンサロ・フェルナンデスよりコインブラのイエズス会学院某修道士へ宛てた書翰の一節には、「異教徒は、飢饉の際に婦人が出産すると、子を取って海岸に連れて行き、潮が来て運び去るように、子の上に石を置くことを習わしとしている。彼らは食べさせることのできない子を何故育てなければならないのかということを経由にしている」(*Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 até o de 1580*, primeiro tomo, edição fac-similada da edição de Évora, 1598, José Manuel Garcia ed., Castoliva Editora, Maia, 1997, f.72v. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第1巻, 同朋舎, 1997年, 330ページ) とある。

フロイス『覚書』に見える堕胎・嬰子殺しに対する言及は次の二箇条である。

「ヨーロッパでは、堕胎は行なわれはするが、たびたびではない。日本ではいとも普通のことであり、二〇回墮ろした女性がいるほどだ」(II:32)

「ヨーロッパでは、嬰兒が生まれた後に殺されるなどめったにないか、ほとんどまったくない。日本の女性たちは、育てることができないと思うと、嬰兒の首に足をのせてすべて殺してしまう」(II:33)

堕胎にせよ嬰子殺しにせよ、こうした悪風を矯める努力の一例は、1561年10月8日付、豊後発信、ジョアン・フェルナンデスよりイエズス会修道士らへ宛てた書翰に見ることができる。この書翰は、「ソロモンに裁きを請うた二人の女性」(*)をめぐる劇が豊後国内で演じられたことを伝える。「この劇は、わが子を殺す異教徒の女性を恥入らせる上で好ましいものであり、母の子に対する自然な愛の力や、そのほか聖書に記された多くの事柄を表していた」(*Cartas, op. cit.*, f.79. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第1巻, 同朋舎, 1997年, 355ページ)。

(*) 「ソロモンに裁きを請うた二人の女性」の逸話は「列王紀上」(3:16-28) に見える。同じ家に住むふたりの遊女がそれぞれ子供を産む。ひとりが誤って自分の子を圧死させ、夜中に他の婦人の子とそっと取り替えてしまう。朝になると、互いに、生き残ったほうがわが子だと主張して譲らない。その結果、ふたりはソロモン王の審判を仰ぐことにした。王は剣をとりよせて、問題の赤子の体を両断するように、そしてふたりの婦人にその半分ずつを分け与えるよう命ずる。真実の母は狂気のようになって、どうか命だけは助けて相手の婦人の手に渡して欲しいと懇願する。ソロモンはそこで子供を真実の母の手に渡した、という話である。

日本において堕胎・嬰子殺しが本格的に横行するようになったのは、江戸中期以降であるといわれる。たとえば、伴蒿蹊『近世畸人伝』(寛政二年[1790]刊)には、「貧人子あまたあるものは、後に産せる子をころす」とあり、西川如見『百姓囊』(享保十六年[1727]刊)には、「子を繁く産する者、初め二人育しぬれば、末はみな省くといひて、殺す事多し、殊に女子は大かた殺すならわしの村里もあり」とあるように、間引きの対象となるのは二児・三児以下の者と、男子よりは女子であった。九州佐賀地方では「一丁越し」と称し、男女に関係なくひとりおきに間引いた。佐藤信淵『経済要録』(文政十

年(1827)刊)には、「今の世に当て、陸奥・出羽の両国ばかりにても、赤子を陰殺すること、年々六、七万人を下らず」とある(『国史大辞典』丸井佳寿子執筆「間引」の項)。

日本の全国人口は17世紀の急成長後、18世紀にはほとんど停滞する。通説によれば人口停滞は、気候寒冷化による凶作の頻発と流行病とによる農村の疲弊、領主の苛斂誅求が、口減らしのための堕胎・間引きの横行に拍車をかけたためである、とされる。

しかし近年の歴史人口学は、江戸中期における堕胎・間引きの横行を次のように解釈するのだそうである。すなわち堕胎にせよ間引きにせよ、窮迫した農民がやむにやまらず行なったというより(むしろそのような例も多数あったであろうが)、男女児の好ましい組合わせや、適当な出生間隔、経営能力と家族規模とのバランスを適正に保つためなど、さまざまな目的をもって行なわれたことなのではないか、と(『国史大辞典』鬼頭宏執筆「人口問題」の項)。

18世紀日本が「マルサスの罠」に陥ることを免れて相対的に豊かな社会を実現し得た背景には、確かに、上に記した計画出産社会(それは同時に計画殺人社会でもある)の存在があったのであろう。それにしても、キリシタン宣教師の書翰や『懺悔録』から拾うことのできる堕胎・中絶・間引きに関する記事は、こうした無慈悲のわががいがいよいよ本格化する以前のものである。江戸中期以降における胎児・嬰子殺しの凄まじさが思いやられる。

いささか注釈が長くなったが、この項の冒頭に掲げた信徒の懺悔に対する神父の訓戒は次のとおり。

Votto no aru vonna, bexxite vazato co vo voroxi, fumi corosu tô va nasage nai, jifi mo mixiranu cocoro no xiruxi dea tocorode, ima iori nochi, go facarai ni macaxete, tatoi catçuietemo, futatabi sô itasu mai to vomoi sadame are.

夫のいる女^{をんな}、別して態^{べつ}と子^{わらわ}を墮^おろし、踏み殺^{とう}す等は情けない、慈悲も見知らぬ心^{しるし}の証であ[「であ^{のち}とは、デアル>デア>デヤ>チャと変化した、その中間の形であって誤りではない]ところで、今より後、^{ごはか}御計らひに任せて、^た仮令^{とひかつ}飢^{ふたたび}ゑても、二度さう致すまいと思ひ定めあれ。

夫のいる女がわらわと子を墮ろし、踏み殺す等は、情けなく慈悲のかけらも見えぬ心の証であるので、今より後、デウスの御計らいに任せて、たとい飢えても、二度とそういうことは致さぬと思ひ定めよ。

あまりにも公式的なというかおごなりというか。告解とは、犯した罪を再度犯さぬための具体的方策を信徒が司祭と相談する場ではない。が、困窮する一信徒にとって、上記のような訓戒を垂れてもらっても、それができれば苦労はない、と途方に暮れるばかりだったのではあるまいか。堕胎・中絶にせよ、嬰子殺しにせよ、この悪習は、宣教師の熱意や善意の信徒の自覚だけではどうにもならぬほど日本社会に深く根を下ろし、かつその蔓延ぶりも全国的であった。

獣姦

コリヤード懺悔録の「第六誡」に反する懺悔を縷々紹介してきたが、その末尾に至って現われるのが獣姦をめぐる懺悔。日本では『延喜式』(927年完成)に「国つ罪」のひとつとして獣姦罪が挙げられている。家畜との一体感が強かった日本の農家では獣姦がときに行なわれていた。獣姦は旧約世界では死罪をもって禁ぜられた。「すべて獣と寝る者は必ず死刑に処せられ」(「出エジプト記」22:18)ることになっていたし、「動物と交わって身を汚してはなら」ず、「女性も動物に近づいて交わってはならない」(「レビ記」18:23)とされた(獣姦をめぐるヨーロッパ中世の神学者の態度についても、ジャン・ヴェルドン『図

説 快楽の中世史』92～94ページ参照)。

それまでの懺悔が総じて具体的にしかも躊躇なく行なわれているのに対し、獣姦の懺悔者に限っては「今申し頭はさうずることは御免なされうず。憚りながら云々」と、かなりのためらいを見せているのが注目される。ちなみに懺悔者が相手にした動物は雌ウマか雌ウシか雌イヌというところであろうか(これはまんざらあてずっぽうではない。獣姦は隠語で「馬たわけ」「牛たわけ」「犬たわけ」と呼ばれたからである。樋口『性と日本人』「資料——性に関する隠語」参照)。

Mata acu ni focori, fomare no tame sore vo catari aravaxi, mata sore fodo indō vo mixiranu mono ni voxiiuru coto : core mo feijei no coto de gozatta. Ima mōxi aravasōzuru coto va gomen nasareōzu : fabacari nagara confession no uchi gia tocorode mōxi marasuru. Qedamono to sando fucai toga ni vochi maraxita. Mata sore mo tagai ni ai chiguiru vo mite sonemi marasuru. Core va jūdo de gozatta.

また、悪に誇り、^{ほま}誉れの為それを語り頭はし、またそれほど淫道^{いんだう}を見知らぬ者に教ゆること、これも平生^{へいぜい}のことでござった。今申し頭はさうずることは御免なされうず。^{はばか}憚りながら、コンヒサンの内ぢやところで、申しまらす。^{けだもの}獣と三度深い科に落ちまらした。またそれも互ひに合ひ契るを見て猜み^{そね}まらす。これは十度^{じふど}でござった。

このような淫欲の悪を自慢し、名誉としてこれを広言し、またさほど色事を見知らぬ者にこれを教えること、これも平生のことでございました。今から申し頭わそうとすること、どうか御容赦を賜われますように。憚り多きことながら、コンヘションの際でございますれば申しあげますが、私、三度にわたり獣と深い科に陥りました。また人と獣が互いに合い契っているのを見て嫉む気持ちさえ起こしてしまいました。こうしたことが一〇度ございました。

以上紹介してきた17世紀前半の日本人キリシタンの性倫理をめぐる懺悔。本稿では、私にとって(なんびとにとっても、というほうがよいかもしれないが) もっとも興味深く思われる第六誠「姦淫してはならない」に反する懺悔を取りあげ多少の考察を試みた。それにしても日本人信徒が発する言葉の何というリアルさであろう、率直さであろう。『聖書』にはっきり禁止の文言がある性的逸脱のうち、『懺悔録』から漏れているのは近親相姦くらいだけではないであろうか(聖ルカが姦淫同然の罪であるとして糾弾する離婚に関する懺悔は、なぜかコリヤード『懺悔録』には見えない)。

イエズス会巡察師アレッシンドロ・ヴァリニャーノは外面的な日本の習俗・マナーには極力これに順応するよう配下の宣教師に指示した。しかし性倫理をめぐることがらは明らかに次元を異にする。適応主義を標榜したイエズス会宣教師でさえ、当然のことながら、日本人の従来の性倫理をあるがままに認めるわけにはゆかなかった(少なくとも庶民の信者に対しては)。ポルトガル系イエズス会士であれイスパニア系托鉢修道僧であれ、宣教師は皆、あらゆる機会を利用して邪淫の非なることを熱心に説いたのであろうが、信徒の現実(少なくとも一部の現実)は上記のごとくであった。

日本では古代以来、きわめて寛容な性道徳が支配的であり、しかもある種の性習俗にいたってはしるべく合理化され讃美されることさえあったことは、本稿でもふれた。性が商取引の具と化して墮落する以前、日本人は性——それは性交そのものの場合もあり、その擬態である場合もある——を五穀豊饒の神を賑わすためのめでたくも神聖な営みと考えてきた。本稿でふれてきたような性習俗なり倫理観なりは、コリヤードが『懺悔録』をまとめた頃の日本のムラムラにあってなお健在であった。性を種保存のための必要悪と見なすような中世カトリックの倫理観とは、まさに水と油の関係である。

そうした風土を有するわが国にキリスト教の第六誡を浸透させることがどれほどの難事であったか、コリヤードが記録してくれた日本人信徒の懺悔を通じて、私どもは生き生きと実感することができる。

もっとも、古野清人が指摘したように、日本に伝わりかつ受容された“キリスト教”が結局のところシンクレティズム（諸教混淆）であって原理的にカトリシズムでもクリスチャニティーでもない。あれはつまるところキリシタニズムにすぎないのだと断じてしまえば（『キリシタニズムの比較研究』（『古野清人著作集』5）三一書房、1973年参照）、コリヤードによって聴取された懺悔のすみずみから匂ってくる異教臭にことさらめくじらを立てる必要はなくなる。シンクレティズムなのだから当然の帰結であるといえればそれで済む。

しかしながら、コリヤードの編著に収められた信徒の懺悔は苛酷な禁教下、文字どおり命がけの信仰生活を保持していた庶民のそれである。しかも幕府にとってみれば、異教臭さが漂うキリシタニズムであろうが純正なカトリック信仰であろうが、徹底した迫害・拷問・処刑の対象であったことに変わりはない。『懺悔録』にはずいぶん自虐的な告白も散見されるものの、それは日本人らしい一種の韜晦趣味の現われであって、彼らの懺悔全般からは、キリシタン信仰を、日本古来の習俗やらムラ社会の束縛やらといかにすりあわせるかに悩みつつも、キリシタンの求める倫理規範に彼らなりに忠実であろうとする真摯な信徒像が浮かび上がる。そうした信徒たちにしてなおこれほどの宗教的“罪惡”に汚されていたこと、そして、あたかもカトリック倫理をあざ笑い挑発するような日本古来の性習俗から、彼らさえ自由ではあり得なかったこと、を考慮するとき、日本人に純正なキリシタン信仰を根づかせるなど、問題をたとえ第六誡に限定しただけでも、第三者の眼から見て、ほぼ絶望的な企てであったと思わざるを得ないのである。

そうである以上、キリシタン信仰とそれに伴う倫理を日本人という異教徒の間に浸透させるには、もう暴力的手段によるしかない（新大陸でイスパニア人が現にやってのけたように）と、在日宣教師が考えた——その実現性の有無を度外視して——のはまことに当然のなりゆきであった。そして、そうした布教政策の危険性を嗅ぎつけた統一権力の側がキリシタン宗門の弾圧に踏みきったのも、これもまた当然の——しかも正当な——措置であったと評するほかはない。

性倫理をめぐる日本人キリシタンの懺悔を取りあげてきた本稿を締めくくるに際して、キリシタン時代に生じた信じがたいエピソードを紹介しておく。邪淫の罪なることを教理書において繰り返し説いた宣教師であるが、彼ら自身おのれの“操”を堅守していたのかどうか。

ジョアン・ロドリゲスといえば通事バテレンと称されて抜群の日本語力を誇るイエズス会最高の日本通である。慶長十九年（1614）のいわゆる「大追放」にさきだつこと4年、慶長十五年に日本退去を余儀なくされたロドリゲスの身辺には妙な噂がくすぶっていた。長崎代官村山当安の奥方との間でロドリゲスが不倫の関係を続けているのではないかという疑念である。1615年12月6日付、マカオ発、マノエル・ディアスのイエズス会総長宛て書翰は、女性問題のために日本からマカオへ送られてきたふたりのイエズス会士から聴取したこととして、次のように記す。

「彼〔ロドリゲス〕は長崎で同伴者なしに一人だけで市の二人の統治者の一人当安の妻〔ジュスタ〕を訪ねることを常としていた。非常に親密な間柄で、時折小用をする時に彼女と一緒に便所に行った程であった。そしてしばしば彼女の着物の中に手を入れて胸にさわった。それを彼女の召使たちが見ていた。彼女たちを通して、彼女の夫がそのことを知った。それ以後、夫は彼女を虐待し、他の妻たちをおいた。そして同パードレとの仲を断然絶ち、これを日本から追放させることまでした」（Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap. Sin. 16-II, f. 252 v. 高瀬弘一郎「長崎代官村山当安をめぐる一つの出来事」『キリシタン時代対外関係の研究』吉川弘文館、1994年、632ページ所引）。

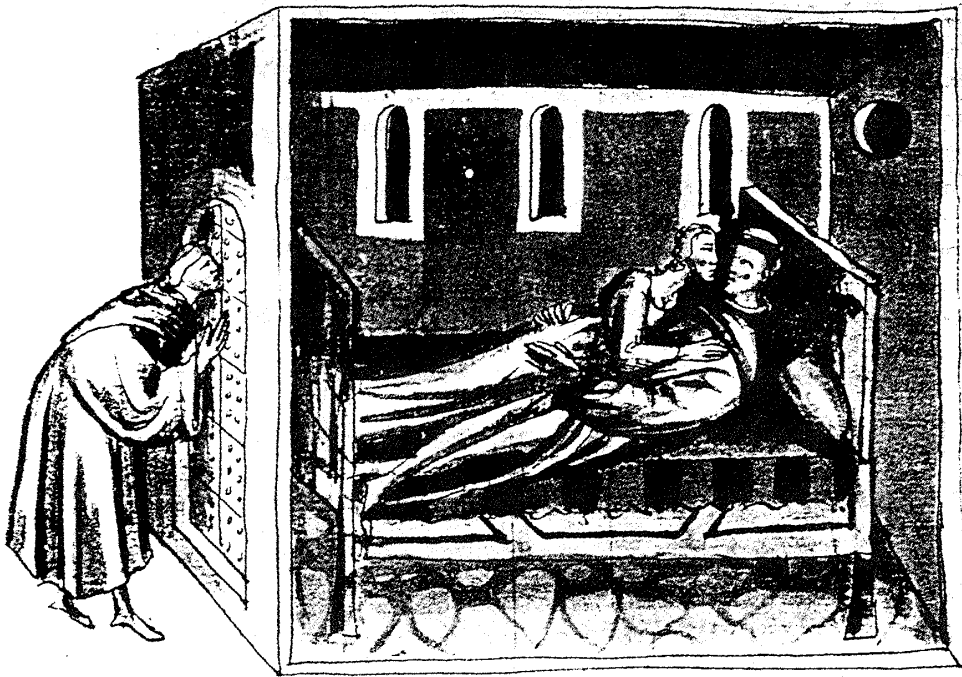


図15 作者不詳『デカメロン』挿絵（1427年）。パリ，フランス国立図書館蔵。今しがた抱いたばかりの女が，今度は恋敵である修道院長の部屋で情事に耽るのを覗き見する修道士。『図説 快楽の中世史』より。

17世紀初め，イルマンに叙品された日本人が女性問題を起こしてイエズス会を去るたびに，性倫理の観点からも日本人には修道生活者としての適格性が欠けるのではないかという論議が日本イエズス会の幹部パードレの間でしきりに交わされた。

が，その手の問題をあげつらうならおのれの貞潔はいったいどうなのだと問いたくなるような醜聞がままたま生じた。1619年2月23日付，長崎発，マテウス・デ・コウロスのイエズス会総長補佐宛て書翰によると，日本人教区司祭トマス・アラキ（後，棄教者となるが，この時点ではまだ信仰を保っている）は次のような消息を自分，つまりコウロス自身に伝えたという。

「パードレ・ヴィエイラ〔セバスティアン・ヴィエイラ〕がしばしば泊りに行き，定宿にしている，あの二人の若い修道女の藁葺きの家の門の落首は，同パードレのことだけを考へて貼られたことは確かだ。自分〔アラキ〕は大勢の世俗の人々から注意されて，それを剥がさせた」と。

で，その落首にはどんなことが書いてあったか。コウロスによれば，なんとそこには「一人の男と一人の女が裸で抱き合っている姿が描かれ，最初の謡は次の通りであった。お前たちが持つ数珠は，お前たちが犯す罪の数を数えるためか，或いはお前たちの愛人の枕に置くためか」。そして「その先まだ別の卑猥な詞が続」いていた（Jap. Sin. 35, f. 98 v. 高瀬弘一郎「キリシタン宣教師が用いた暗号」『キリシタン時代対外関係の研究』643ページ所引）。

以上は，日本布教にもっとも重要な役割を果たしたイエズス会士の醜聞である。コリヤードはドミニコ会士であり，マドリードとローマでイエズス会に対する告訴状を提出したほどの反イエズス会の闘士であったが，聖職者の性倫理に関して，イエズス会であろうがドミニコ会であろうが，その対応に違いのあろうはずはない。断わっておきたいが，私など品性高雅ならざるゆえか，こういう破戒僧に出逢っても，その人間臭さに拍手を贈りたくなりこそすれ，道学者ぶってこれをののしる気持ちに

など全然ならぬ。カトリックの側に立つ歴史家は、上のような逸脱行為を「とるに足らぬ例外」として見て見ぬふりを決めこむのであろうが、そんな態度で編纂される人間性不在の歴史につきあう義理は、私にはない。姦淫禁止の掟を守らぬパードレがいてもそれはそれで大いに結構だとは思いますが、そんな人物がもっともらしい顔で「汝姦淫する勿れ」と説教している図は、お笑いぐさ以外のなにものでもあるまい。イエズス会士を表わすポルトガル語 *jesuíta* が他のヨーロッパ諸語と同様、転じて軽蔑語として偽善者・ペテン師・策謀家を意味するようになったことの背景には、それを醸成した諸事情の積み重なりがあったことを忘れるべきではない。

たかがバテレンのセックス・スキャンダルなどはまだよい。キリシタン史のもっと決定的な局面において、宣教師のこういう二枚舌がときに顕在化し、その結果、信徒の離反が誘発されたり、統一権力の側が教会の本質に対する疑惑を募らせたりした事例は、それこそ枚挙にいとまなしといってよい。

今後私は、コリヤード編『懺悔録』の全容を日葡両語によって紹介・検討してゆきたいと考えている。それを通じて明らかとなるであろう、カトリック倫理と日本古来の諸習俗との *encontro* (エンコントロ=衝突) および *desencontro* (デゼンコントロ=すれ違い) の具体的諸相を、主としてポルトガル人読者へできるだけ精確に伝えてみたい。そして種々の視点から、キリシタン時代の日本にはカトリック倫理や西欧中心主義の単純な押しつけを鋭くはねつけるだけの道德律が牢固として存在したことを、私なりの理解に即しつつかの地へ発信してみたいと思う。